やってみよう、アート

国立新美術館ワークショップ記録集

国立新美術館 アーティスト・ワークショップ

参加し、体験し、発見すること、そして新たな視点でアートに触れること、それが国立新美術館のアーティスト・ワークショップのもっとも大切なコンセプトです。
このワークショップは、「新しい美術の動向」を紹介することを重要な使命としている国立新美術館ならではのプログラムとして誕生しました。ワークショップを行なうのは、美術家やファッションデザイナー、プロダクトデザイナーなど、さまざまな分野で活躍するアーティストたちです。私たちと同じ時代を生きる彼らは、柔軟な視点と飽くことのない探求心によって、既存の価値観を打ち破り、全力で独自の表現を追求しています。アーティストはどんなことを考え、どんな方法で、何を伝えようとしているのか。アーティストと直接に触れ合うことで、新たな視点でアートに触れる機会が生まれます。それはさらに、美術を、自分なりに楽しむことにもつながります。
ワークショップの主人公は参加者一人ひとりです。アーティストの話に耳を傾けることは、彼ら独自の視点や表現を知る上で貴重な機会となります。一方、実際にものを作ったり、身体を動かしたり、自然に触れたり街を歩いてみたり・・・参加者はアーティストとともに時間を過ごしながら、さまざまな体験を通じてアートを楽しみます。いつもとは違った視点でものを見つめ、自分と向き合い、表現することや工夫することの面白さを体験することは、アートの新たな魅力を発見するきっかけになるかもしれません。あらかじめ用意された目標もなければ、作品の完成にこだわる必要もありません。自らが参加することで、アートを楽しむための自分自身の新たなとびらを開くこと、それがアーティスト・ワークショップの目指すところです。

この記録集は、2007年3月から2011年2月までの4年間に、国立新美術館教育普及室が企画・開催した29回のワークショップの記録です。ワークショップではいつも、私たちの予想をはるかに超える新しい発見と驚きがありました。子どもたちの溌剌とした表情だけでなく、大人たちが生き生きと、かつ真剣に取り組む姿も印象的でした。運営にあたっては、国立新美術館教育普及室のインターンと学生サポート・スタッフにも活躍いただきました。
この記録集によって、ワークショップをとおした国立新美術館の取り組みをご紹介するとともに、ワークショップで参加者が体験したことを、少しでもお伝えできれば幸いです。最後に、何度も話し合いを重ねながらワークショップを企画し、開催にご協力いただいたアーティストの方々に、あらためてお礼申し上げます。

国立新美術館

国立新美術館 アーティスト・ワークショップの開催にあたり、
講師各位ならびに多くの方々から多大なるご支援とご協力を賜りました。
ここに記し、深い感謝の意を表します。
また、ここにお名前を記すことができなかった方々にも、
心から御礼申し上げます。（順不同・敬称略）

講師
秋岡美帆
秋山さやか
浅葉克己
安齊重男
イシイリョウコ
市川武史
伊藤千枝
井上尚子
大平 實
奥谷 博
金田実生
楠原竜也
紺野弘道
斎藤ちさと
佐藤可士和
さらひらき
清水久和
白鳥建二
高橋唐子
永井一史
中島祥文
浜田 涼
paramodel
菱沼良樹
藤城成貴
松永 真
松本陽子
mafuyu
ノンムブセレロ・マブンデュラ
皆川 明
宮本茂紀
エリオット・ムキーゼ
村井進吾
山縣良和

目 次

国立新美術館 アーティスト・ワークショップ			3
謝辞			5
ワークショップの紹介			
平成18(2006)－19(2007)年度			9
1.	「自分のシンボルマークを作ろう！」 「教えて！可士和さん！」(講演会とワークショップの同時開催)	佐藤可士和	10
2.	「からだを遊ぶ！」 「スキン＋ボーンズ―1980年代以降の建築とファッション」展 関連企画 ボーンズ編	楠原竜也	12
3.	「３Dな布(スキン)を作る」 「スキン＋ボーンズ―1980年代以降の建築とファッション」展 関連企画 スキン編	菱沼良樹	14
4.	大学生とのワークショップ「アートまわりのおしゃべり―感じたこと、聞きたいこと」 「安齊重男の “私・写・録”(パーソナル フォト アーカイブス) 1970－2006」展 関連企画	安齊重男	16
5.	高校生のためのデザインワークショップ 「学校のシンボルマークを作ろう」「自分のシンボルマークを作ろう」 「ADC大学」同時開催	中島祥文、松永 真、 浅葉克己、永井一史	18
6.	「わたしの家、わたしの服～着られるお家をつくろう～」	山縣良和、mafuyu	20
7.	「今日はちょっぴり画伯な気分～奥谷 博先生と描く美術館～」	奥谷 博	22
8.	「くんくんウォーク～美術館のにおいを探せ！～」	井上尚子	24
9.	「ヒューマンサイズ・プロジェクト～つくろう！自分サイズのバルーン！～」 「アーティスト・ファイル2008―現代の作家たち」展 関連企画	市川武史	26
平成20(2008)年度			29
10.	「空想の場所をつくってみよう」 「アーティスト・ファイル2008―現代の作家たち」展 関連企画	さわひらき	30
11.	「ミナ ペルホネンでつくる未来生活」 プログラム「ミナ ペルホネンとデザイン」(講演会とワークショップの同時開催)	皆川 明	32
12.	「鑑賞ワークショップ～ことばで楽しむエミリー展～」 「エミリー・ウングワレー展―アボリジニが生んだ天才画家」関連企画	白鳥建二	34
13.	「アイスベキモノタチ～発見！おもしろデザイン！～」	清水久和	36
14.	「デザインってなんだろう？？～やってみよう！イスのデザイン～」	紺野弘道	38
15.	「六本木をつづる～散策を“手紙”にたくして～」	秋山さやか	40
16.	「作ろう！オリジナル・モビール」	藤城成貴	42
17.	「ミニチュア・ムシワールド～虫からみた世界をつくろう～」 「アーティスト・ファイル2009―現代の作家たち」展 関連企画	大平 實	44
平成21(2009)年度			47
18.	「石から生み出すいろいろなカタチ」 「アーティスト・ファイル2009―現代の作家たち」展 関連企画	村井進吾	48
19.	「やってみよう、美術体操～名画、名作を体感！～」	高橋唐子	50
20.	「チャレンジ！抽象画～向き合う心、あふれ出る色～」 「光　松本陽子／野口里佳」展 関連企画	松本陽子	52
21.	「とらえよう、レンズの向こう側～デジカメで撮る抽象写真～」	浜田 涼	54
22.	「パラモデルといっしょにプラレールであそぼう」	paramodel	56
23.	「人形作家とつくる、オリジナルキャラクター」	イシイリョウコ	58
24.	「傘をつかってアニメーションを作ろう」 「アーティストファイル2010―現代の作家たち」展 関連企画	斎藤ちさと	60
平成22(2010)年度			63
25.	「カラー・ワイヤーでつくる小物」	エリオット・ムキーゼ、 ノンムブセレロ・マブンデュラ	64
26.	「木ってなんだろう？ ～見て、聞いて、さわってみよう～」	宮本茂紀	66
27.	「カラダで鑑賞！ マン・レイさんの世界」	伊藤千枝	68
28.	「カメラでとらえよう 風のそよぎ 光のゆらぎ」 「陰影礼讃―国立美術館コレクションによる」展 関連企画	秋岡美帆	70
29.	「私の線を集めよう」	金田実生	72
ワークショップリスト			74

凡例
各ワークショップの説明は以下の者が執筆し、
「まとめ」の文末に大文字のイニシャルで記した。

鳥居 茜(AT)
西野華子(HN)
本橋弥生(YM)
吉澤菜摘(NY)

平成18(2006)ー19(2007)年度

1

「自分のシンボルマークを作ろう！」

プログラム「教えて！ 可士和さん！」（講演会とワークショップの同時開催）

講師プロフィール / 1965年東京生まれ。博報堂を経て「サムライ」設立。ユニクロ・グローバルブランド戦略のクリエイティブディレクション、国立新美術館のロゴマーク、今治タオル、明治学院大学のブランディング等、進化する視点と強力なビジュアル開発力によるトータルなクリエイションで高い評価を得る。

開催日時：2007年3月24日（土）10:00－13:00
参加者：18名
対象：小学校高学年
参加費：無料
場所：別館3階多目的ルーム

アーティスト・ワークショップ 1

佐藤可士和（さとう かしわ） アートディレクター / クリエイティブディレクター

概要 / 国立新美術館の「新」のマークをデザインした佐藤可士和さんと一緒に、「自分のシンボルマーク」をつくり、身の回りのデザインやマークについて考えました。

使ったもの：スケッチブック、色鉛筆、水彩絵具、カラーペンなど

● プログラムの内容と流れ

1. 講師のお話（45分）
お菓子の箱から洋服、ゲーム、さらに地下鉄や郵便局にいたるまで、私たちの身の回りにあるものには、必ずといって良いほどシンボルマークがついています。シンボルマークの制作は、アートディレクターである可士和さんの重要な仕事の一つ。国立新美術館のシンボルマークをデザインしたのも、可士和さんです。参加者全員が自分の名前と好きな色を言って自己紹介をした後、可士和さんからシンボルマークの意味や役割について話を聞きました。

2. 制作（75分）
アートディレクターになったつもりで、「自分のシンボルマーク」づくりに挑戦します。
制作のヒントは、自分の名前や自分の特徴、好きなこと、今注目していることなど。名前だけでも、漢字やひらがな、カタカナ、ローマ字など、色々あります。浮かんでくるアイデアを、紙に描きとめます。自分を知るには、自分についてじっくり考えることが大事。でも、自分と向き合うって、なかなか難しい。
見つけ出した「自分らしさ」を、色鉛筆や絵の具、サインペンをつかって形にします。
「自分らしさ」を表すいくつかの要素を組み合わせたり、一つの「特徴」をとことん追求したり、表現の方法はさまざまです。小さなマークの中に「自分らしさ」を凝縮するために、何度も何度もやり直します。

3. 発表（40分）
「自分」についてじっくり考え、「自分らしさ」を見つけ出す時間がとても重要、と可士和さん。一人ひとりの名前や好きなものが、色や形に置き換えられ、たくさんのシンボルマークが生まれました。

● まとめ
アートディレクター。子供たちにとっては、初めて聞く言葉です。私たちが普段目にするシンボルマークの制作は、アートディレクターの重要な仕事の一つです。このワークショップでは、シンボルマークをとおして「デザインすること」の意味を知り、その面白さを体験しました。
テーマは「自分のシンボルマークをつくろう！」。自分はどんな人？どんな特徴があるの？そんな問いかけから制作は始まりました。でも、「自分らしさ」を見つけるのは意外と難しいものです。そして、それと同じくらい難しいのは、それを形や色で表現すること。頭と手をつかい、試行錯誤しながら、言葉で表現される「自分らしさ」を一つのマークに仕上げていきます。その体験は、普段何気なく見ているシンボルマークに隠されたさまざまな意味や工夫を知るきっかけになったのではないでしょうか。それはまた、言葉で表現されるものを色と形に置き換えること、つまりデザインすることの難しさと面白さを知ることでもありました。（HN）

2

「からだを遊ぶ！」

「スキン＋ボーンズ―1980年代以降の建築とファッション」展 関連企画 ボーンズ編

講師プロフィール / 玉川大学文学部芸術学科演劇専攻卒業。2002年「APE」を結成。「多くの人にHAPPYを届ける」をテーマに作品を創作、国内外にて公演を行う。近年、幼児から大人までを対象としたワークショップや、学校等へのアウトリーチにも積極的に取り組み、表現活動と教育活動を同時に実現することを目指している。

開催日時：2007年7月29日（日）11：00－16：30
参加者：11名
対象：小学校3～6年生
参加費：500円
場所：別館3階多目的ルーム、講堂、企画展示室2Eほか

アーティスト・ワークショップ 2

楠原竜也（くすはら たつや）　振付家・ダンサー / APE主宰

概要 / ダンサーの楠原竜也さんと身体感覚を磨きながら、展覧会を鑑賞し、想像力を駆使して新たに身体表現にチャレンジしました。

使ったもの：布（7m×7m）、懐中電灯、バンダナ等大きめのハンカチなど
参加者持ち物：昼食、飲み物、汗拭きタオル、着替え

● プログラムの内容と流れ

1. 参加者およびスタッフ自己紹介（10分）
まずは別館3階多目的ルームで、参加者とスタッフの自己紹介。その後、全員で講堂へ移動します。

2. 講師登場、ウォーミングアップ（40分）
講堂にやってきた子ども達が目にしたのは、薄暗闇の中でふわふわ浮いている巨大な布。すると、突如音楽が流れ、布の中から講師の楠原さんが踊りながら登場！
全員で布の中に入ってワークショップの説明を聞きました。

広い講堂を使って、ウォーミングアップ開始！楠原さんの動きを真似したり、鬼ごっこをしたりして、身体をほぐします。

3. ブラインドウォーク（45分）
二人一組になったら、ひとりは目を覆って何も見えない状態になります。手を引かれてたどり着いた先は…。なんと、芝生！裸足になって歩いたり、石や植物に触れたりしました。目が見えないと、いつもよりも感覚が敏感になります。

4. 昼食（50分）
別館3階多目的ルームに戻り、持参したお弁当を皆で食べて、ひと休み。

5. 「スキン＋ボーンズ」展を鑑賞（40分）
展示室では、楠原さんから建築物の構造についてお話を聞きました。その後、3～4人のグループに分かれ、「面白いと思う形」をキーワードに鑑賞。

6. 身体を動かす（90分）
● 多目的ルームに戻ったら、再び身体を動かすためのウォーミングアップ。二人一組になって、「肩と肩をつけて」「今度は肩とかかと！」など、楠原さんの言葉通りに身体を動かします。

● 展覧会をみて、面白いと思った作品を一人ずつ発表。グループ内で1作品を決めたら、メンバー全員で選んだ作品の形を身体で表現します。他のグループは、どうしたらより正確に作品を再現できるかアドバイスをしました。
布をかけてみると、見え方は違ってくるでしょうか？
さまざまな意見が飛び出します。

● 7m四方の巨大な布を使って、参加者全員で布が作り出す空間の面白さを体験しました。覆い被された布の内部で参加者は次々とポージング。布の中で見る身体の動きと、外側から見える形の違いに注目します。
● 最後は、お父さん、お母さんも、一緒に布の中に入って、布の中で子どもたちが作り出す空間を体験しました。

● まとめ
ファッションと建築において共通する特徴を、概念や形態、構成、技法などをテーマに紹介した「スキン＋ボーンズ―1980年代以降の建築とファッション」展（2007年6月6日（水）～8月13日（月））。展覧会に関連して開催されたワークショップでは、視覚をさえぎり身体感覚を敏感にさせたり、展示室で「面白い形」を切り口に想像力を使って作品を鑑賞し、さらには鑑賞した作品を身体で表すなどして、さまざまな角度から身体に親しみました。また、ファッションや建築に見出される表面と構造の関係を探るために、骨組みに見立てた身体に巨大な布を覆い被せ、構造物の形態の変化を検証しました。身体を使った表現を通して、想像力を駆使し、新たに創造することの楽しさを知る一日となりました。（AT）

● 参加者の感想
・私が一番楽しかったのは目かくしして、芝生や葉っぱをさわったりしたことです。最初に目かくしをしたから、風景も分からず、見えた時と目かくししした時では全然ちがいました。美術館もいろいろあっておもしろかったです。（10歳 / 女子）
・美術館にあった、家や服がとてもかわっていました。作品をまねしてやるのが一番楽しかったです。いつもとちがって楽しかったです。（9歳 / 男子）

3

「3Dな布（スキン）を作る」

「スキン＋ボーンズ―1980年代以降の建築とファッション」展 関連企画 スキン編

講師プロフィール / 「スキン＋ボーンズ」展出品作家。1958年生まれ。文化服装学院卒業後、三宅デザイン事務所を経て独立。1992年YOSHIKI HISHINUMAのブランド名でパリ・コレクションにデビュー。1996年毎日ファッション大賞受賞。ネザーランドダンスシアターやパリ・オペラ座などのバレエ衣装も手がける。2010年オーガニックだけの新ブランドを立ち上げる。

開催日時：2007年8月4日（土）13：30－16：30
参加者：22名
対象：一般
参加費：2,500円
場所：別館3階多目的ルーム

アーティスト・ワークショップ 3

菱沼良樹（ひしぬま よしき）　ファッションデザイナー / テキスタイルデザイナー

概要 / ファッションデザイナーの菱沼良樹さんがメーカーと開発した、熱湯に浸すと収縮する特殊な素材を使用し、世界に一つだけのオリジナルTシャツを作りました。

使ったもの：菱沼氏がメーカーと開発した特殊な生地、糸、針、輪ゴム、電磁調理器、鍋、ミシン、ボウルなど
参加者持ち物：Tシャツに型どりしたいもの

● プログラムの内容と流れ

1. 講師の活動紹介（15分）
菱沼さんから、これまでに制作した作品やその着想源について話を聞きました。独創的な菱沼さんのデザインが、実は日常生活からアイデアを得たものであることに、驚きの声が上がりました。

2. ワークショップの内容、流れ、および素材に関する説明（30分）
菱沼さんがメーカーと共同開発した、熱湯に浸すとある部分が溶けて繊維が収縮する、特殊な生地の説明を受けました。

3. Tシャツ制作（100分）
● 小さな布で実験
参加者は持参した型を、特殊な生地に巻きつけます。型を巻きつけた生地を熱湯につけると、生地はその型の形に成形されます。ただし、一度成形させると形を変えることができないので、要注意！

● いよいよ本番
菱沼さんが用意した型紙から、生地を切り出し、ミシンで縫い合わせます。
縫い合わせた生地に、参加者が持参した型や木片などをつけていきます。
生地を熱湯に浸した後、熱湯から生地を取り出して、水洗いして型を外せば完成です。

4. 作品発表（30分）
同じ型紙から、参加者それぞれのオリジナリティにあふれる作品が出来上がりました。作品に託した参加者各自の思いやこだわりを、皆の前で発表しました。

● まとめ

常にファッションの可能性を追求し、世界を舞台に活躍を続ける菱沼さん。「スキン＋ボーンズ―1980年代以降の建築とファッション」展（2007年6月6日（水）～8月13日（月））の出品作家でもあった菱沼さんを講師に迎えたワークショップの特色は、何より菱沼さんが開発に携わった造形性の高い生地を用いたことにありました。
従来の生地は、骨格や筋肉を覆う皮膚のようなもので、布自体には支持体（構造）としての機能がありません。一方、菱沼さんが開発に携わったこの生地は、それ自体が半ば支持体としての役割も果たすため、表面に自立した形を作ることができるのです。
新しい生地を創り出すところからファッションのデザインを手がける菱沼さんの創作活動の原点や、そこから得たインスピレーションを自分の作品に仕上げていく際の創作秘話は、なかなか聞くことのできない興味深いものでした。菱沼さんの自由な発想と探究心に感化され、参加者は、その最先端の生地に持参した型で自分の痕跡を残して新たな作品を生み出そうと、菱沼さんとのコラボレーションに熱中しました。（YM）

● 参加者の感想

・他で体験できないもので、大変興味深かった（本当は菱沼officeの企業秘密かも知れないのに…）。（40代女性）
・全て初めて見聞きすることでとても勉強になりました。自然界にある物の形や日常目にしている物の形からインスピレーションを得て、デザインを考えているということが心に残りました。（30代女性）
・珍しい素材を扱って楽しかった。出来上がりを想像しながら制作するのが難しかったが、うまくいってもいかなくても楽しいと思った。さまざまなものからアイデアを取り入れて新しい衣服を作られている菱沼さんの作品がとても刺激的だった。（50代女性）

4

大学生とのワークショップ
「アートまわりのおしゃべり―感じたこと、聞きたいこと」

「安齊重男の“私・写・録”1970－2006」展 関連企画

講師プロフィール / 1939年神奈川県生まれ。1970年から今日に至るまで現代美術の現場を記録し、数々のアーティストのポートレイトや作品写真を撮りためる。現代美術の生の姿をとらえたその写真は、アート・ドキュメントとしての資料的価値も含め、国内外で高い評価を受けている。

開催日時：2007年9月23日（日）、30日（日）14：00－16：30
参加者：51名（23日：18名、30日：33名）
対象：大学生
参加費：無料
場所：別館3階多目的ルーム

アーティスト・ワークショップ 4

安齊重男（あんざい しげお）　アート・ドキュメンタリスト

概要 / 現代美術の現場を長年見つめてきた安齊重男氏と学生が、美術や人生観について対話形式で語り合いました。

● プログラムの内容と流れ

1. トーク・セッション（60分）
「展覧会を見て、気になる写真はあった？」「今日は何の話から聞きたい？」「あなたは今大学で何をしてるの？」ワークショップ開始と同時に、安齊さんから学生たちに次々と質問が投げかけられました。写真を撮り始めたきっかけや著名アーティストとのエピソードなど、ご自身の話も安齊さん独特の語り口で披露され、その話術にグッと引き込まれる学生たち。「アートまわりのおしゃべり」は、冒頭から白熱した雰囲気で進んでいきました。

2. 質疑応答、参加した感想の発表（50分）
トーク開始から1時間が経過したところで、学生たちから質問を募りました。安齊さんの経験談についてさらに掘り下げる質問や、学生自身の進路選択の相談など、様々な問いが投げかけられ、安齊さんがその一つひとつに真剣に答えていきました。その後、今日のトークの感想を参加者一人ひとりが発表しました。

3. 安齊さんから大学生へのメッセージ、記念撮影（15分）
約2時間のトークの中で、たくさんのメッセージを学生たちに伝えた安齊さん。
「本人が一番何をどうしようとするのか、したいのか、それをわかっていることが大切」「続けていくことが大切で、それが積もった結果は、過去に無かった新しくて面白いものになる」「現代美術の写真を撮り始めたのは30歳を過ぎてからだったけど、それ以前にやっていたことも全部今に役立っている。絶対に無駄にはなってない」
そのメッセージを受け止め、吸収した学生たちは、最後にアート・ドキュメンタリスト安齊重男と記念撮影をし、濃密な「おしゃべり」ワークショップを終えました。

● まとめ
「安齊重男の“私・写・録”1970－2006」展（2007年9月5日（水）～10月22日（月））に関連して「直接語り合うことを通じて、学生たちにこれからの自分を考えるきっかけをつかんでほしい」という安齊さんの思いから、異例ともいえる対話形式のワークショップを開催しました。展覧会の話、安齊さんの経験談やアーティストとのエピソード、さらには学生の進路相談まで、対話の内容は多岐に渡り、約2時間の熱気に満ちた「おしゃべり」が展開されました。2回にわたって大学生が熱く意見を交わしたこのワークショップは、さまざまな分野で学ぶ学生同士の交流の機会にもなりました。（NY）

● 参加者の感想
・安齊さんのお話は勿論、同世代の人たち（自分と同じことをやっている）の考え方を聞ける貴重な場でした。（20代男性）
・安齊さんと身近におしゃべりができて、とても楽しかったです。安齊さんの人柄、それを通じて現れた写真たちに感動しました。たくさん笑ったワークショップでした。（20代女性）
・一人ひとりの質問に一つひとつ言葉を返してくれて、「ただ何かを言いたい人」が質問するようなワークショップと違って、一方通行じゃないのがよかった。（20代女性）
・「何かを作る人は異常な位、行くところまで行った方がいい」という話が印象的でした。とても良い刺激になりました。（20代女性）
・学校での先生とはまた違い、表現者として考えていること等が聞けてよかった。
また、いろんな学校の方もいて、普段アートにかたよりがちな意見とは違っていて面白かった。（20代女性）
・安齊さん自身から様々な話を聞くことができて、とても良い刺激になった。対話のみというシンプルな形だったので、とても理解し合えたと思った。作品に対する印象がまた変化すると思いました。（20代男性）
・展示の感想を一人一人聞くと、自分では感じなかったようなことを考えている人がいるんだと発見できました。
・安齊さんが撮影する時の被写体との関わり方みたいなのが垣間見れた気がして、刺激になった。（20代男性）
・安齊さんの生き方が聞けて、今後のこれからの自分につながるようなワークショップになりました。（20代男性）
・ワークショップという場で、今まで知らなかった人たちのそれぞれの思いが聞けたことは、素晴らしい出来事のように感じます。（20代女性）
・先生の話と学生さんの話、両方聞けてよかったです。私は通信の学生なので、普段学生やアーティストの話を聞く機会がないので。（40代女性）
・さまざまなお話を聞くことができ、とても興味深いものになりました。安齊さんのお話も新しい視点を開いてくれるものがあったりしたので。いろいろな学生さんがいて、とても面白そうな方が多くて、交流したいなと少し思いました。（20代男性）

5

高校生のためのデザインワークショップ
「学校のシンボルマークをつくろう」
「自分のシンボルマークをつくろう」

「ADC大学」同時開催

講師プロフィール / 中島祥文 1944年生まれ。多摩美術大学卒。J.W.トンプソンなどを経て1981年ウエーブクリエーション設立。/ 松永 真 1940年生まれ。東京藝術大学卒。資生堂宣伝部を経て、1971年松永真デザイン事務所設立。/ 浅葉克己 1940年生まれ。桑原デザイン事務所等を経て1975年浅葉克己デザイン事務所設立。/ 永井一史 1961年生まれ。多摩美術大学卒。博報堂を経て、2003年株式会社HAKUHODO DESIGN設立。

開催日時:2007年10月20日(土)、21日(日)13:30−17:30
参加者:74名(20日:36名、21日:38名)
対象:高校生
参加費:無料
場所:別館3階多目的ルーム

アーティスト・ワークショップ 5

中島祥文(なかしま しょうぶん) アートディレクター　松永 真(まつなが しん) アートディレクター
浅葉克己(あさば かつみ) アートディレクター　永井一史(ながい かずふみ) アートディレクター

概要 / 最前線で活躍するアートディレクターを講師に、デザインの基礎を学ぶワークショップ。
シンボルマークについて考え、「自分」と「学校」のシンボルマークを制作しました。

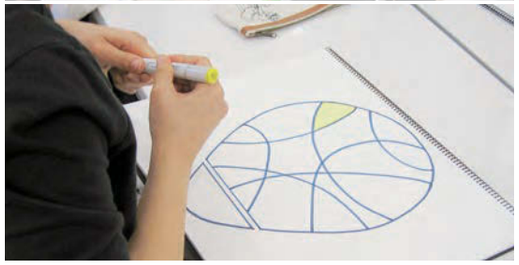
使ったもの:スケッチブック、鉛筆、コピックマーカーなど

● プログラムの内容と流れ

1. 講師のお話
私たちの身の回りに溢れるシンボルマーク。多くの企業や商品、イベント等のシンボルマークを手がけるのは、アートディレクターと呼ばれる人たちです。
初めに、講師のアートディレクターから、シンボルマークを制作する過程についてのレクチャーを受けました。もっとも重要なのは、対象をよく「分析」すること、そして独自の表現を追及すること。

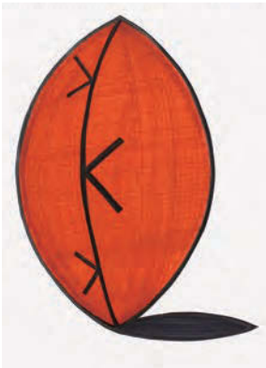
2. 課題制作
1日目:「学校のシンボルマークをつくろう」
2日目:「自分のシンボルマークをつくろう」
テーマは当日、講師から発表されました。

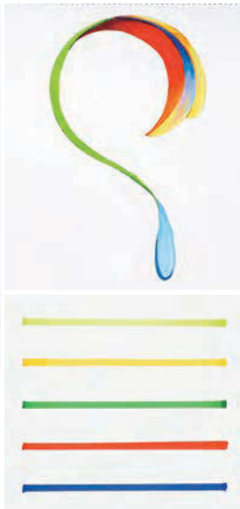
まずは、テーマである「自分」あるいは「学校」について分析します。一番大事なところ、個性的なところは何？
分析したイメージを形と色で表します。自分らしい表現を探ります。



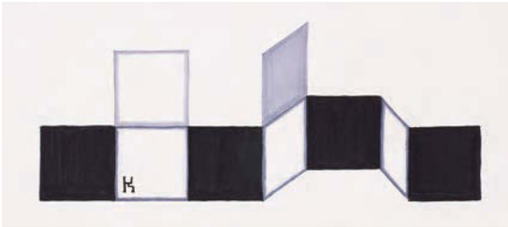
3. 作品発表
一人ひとりの作品をプロジェクターに投影し、講師が講評を行ないました。

4. 完成したシンボルマーク
学校のシンボルマーク





自分のシンボルマーク



● まとめ
今回のワークショップでは、普段何気なく目にしながら私たちの記憶に深く刷り込まれているシンボルマークの意味について考え、その制作に挑戦しました。シンボルマークの制作では、何よりもまず対象—ここでは「自分」と「学校」—をよく観察し、色々な角度から分析することが重要です。対象の特徴や個性を知り、一つの特徴、あるいはその組み合わせを絵や文字で表わし、さらに抽象的あるいは具体的な形と色で表現します。分析の結果は他の人と同じでも、それを形にする際には独自の表現を追及することが重要です。シンボルマークの制作をとおして、デザインとは手の作業だけでなく、物事とじっくり向き合い、頭で考え、それを独創的な表現によって人に伝える試みだということを体験しました。(HN)

● 参加者の感想
・憧れのデザイナーの生の声や話を聞き、さらに指導して頂いて、貴重な体験になりました。
・シンボルマークの理念に触れることができ、とても勉強になりました。
・普段学校で教わっている内容とは全く違うので、楽しかったです。頭の柔軟さに驚きました。
・“自分のマークを考える”ということで、自分がこんな人間なのかということを考えられたのが面白かったです。形、色使い、思いなど本当に様々なものがあることを知りました。
・学校以外の他の同年代の作品を見られてとても新鮮でした。
・「おもしろい」と褒めてもらえたのがすごく嬉しくて、これからの励みになると思います。
・実際に作品を作ってみて、人に伝えるということの難しさを知りました。
・どれだけシンプルにできるか、どれだけ相手に伝えたい要素を表現できるか、まだまだ難しいけれど、もっと勉強したいと思いました。

6

「わたしの家、わたしの服
～着られるお家をつくろう～」

講師プロフィール / 山縣良和 2005年セントラル・セントマーティンズ美術学校卒業。ジョン・ガリアーノのアシスタントを務めた後、2007年玉井健太郎氏と㈱リトゥンアフターワーズを設立。2009年～同代表取締役。/ mafuyu 2002年女子美術大学絵画科洋画専攻卒業。個展を中心とした活動を展開。雑誌『装苑』などへ作品を提供。

開催日時：2007年12月1日（土）10：30－16：30
参加者：23名
対象：小学校3～6年生
参加費：1,000円
場所：別館3階多目的ルーム、1階ロビー、地下SFTギャラリー

アーティスト・ワークショップ 6

山縣良和（やまがた よしかず） ファッションデザイナー　mafuyu（まふゆ） ニットアーティスト

概要 / ファッションデザイナーになったつもりで、“家（ホーム）”、“着ること（ウェア）”をテーマに、ダンボールを支持体とした家着（ホームウェア）を制作。最後にはファッションショーを開催し、制作した作品をまとって多くの来館者の前で披露しました。

使ったもの：ダンボール、画用紙、古着、毛糸、ポスターカラー、カラーペン、色鉛筆、ガムテープ、接着剤、新聞紙、はさみ、カッターなど
参加者持ち物：いらなくなったおもちゃ、洋服

● プログラムの内容と流れ

1. 講師の活動紹介（20分）
ファッションデザイナーって聞いたことあるけれど、何をする仕事なの？ニットアーティストって何？子どもたちは、真剣に講師の話に聞き入りました。

2. SFTギャラリーにて展示「MY TOWN IN MY HOME」を見学（20分）
講師の山縣さんとmafuyuさんのコラボレーション作品を見学。「家の形をした服」という思いもよらない発想に、子どもたちは驚きと興奮でいっぱい。

3. 「ファッションデザイナーとは」（15分）
コンセプトを立てること、デザイン案を考え、実際に形にすることからショーの構想まで、ファッションデザイナーの一連の仕事について、山縣さんからレクチャーを受けました。

4. デザイン画制作（40分）
いよいよデザイナーとしての創作開始！理想とする家の形をした服のデザインを考えます。初めての作業に、わくわくしながらデザイン画を描きました。

5. 昼休憩（40分）

6. ダンボールで実際に家着を制作（165分）
デザイン画で描いたイメージをもとに、ダンボールで家着の制作をしました。
・まずダンボールを切り出します。頭の位置、首の出し方、手を出す位置や出し方などを工夫します。
・大きな刷毛で絵具を塗ったり、持ってきた古着やおもちゃを貼り付けて、個性豊かな作品が完成しました。

7. ファッションショーの準備と練習（10分）
最後の仕事はファッションショー。「ファッションショーってどうすればいいの？」という参加者の疑問に対し、山縣さんとmafuyuさんが、登場の仕方、ステージの歩き方を説明しました。モデル初デビューの参加者たちは、どきどきしながら練習です。

8. ファッションショー（15分）
美術館のエントランスロビーでショーを開催。お客さんが大勢見守る中、家着を着た子どもたちが、音楽に合わせて堂々とステージの上をウォーキング。お客さんたちから大きな拍手を受けました。

● まとめ

ファッションデザイナーとニットアーティスト。クリエイティヴでカッコいいというイメージはあるけれど実際には、どのような仕事なの？SFTギャラリーで開催されていた「MY TOWN IN MY HOME yoshikazu yamagata to mafuyu」展（2007年10月17日（水）～12月24日（月））に出品していた山縣さんとmafuyuさんを講師に迎えた今回のワークショップは、「家の形をした服をつくる」という創造性の高い作業を通して、ファッションデザイナーの仕事を、着想から制作、発表まで一通り実践するという内容でした。日常のふとしたことからイメージを膨らませ、それをデザイン画に起こし、作品へと仕上げていく面白さと難しさ。実際にできあがった作品は、大胆な発想に斬新な色使いで、どれも個性際立つものでした。そして最後にショーという形で大勢のお客さんの前で自分の作品を発表したことは、参加した子どもたちにとっては格別で、スリリングな体験となりました。（YM）

7

「今日はちょっぴり画伯な気分 ～奥谷 博先生と描く美術館～」

講師プロフィール / 「旅」展出品作家、文化功労者、日本芸術院会員。1934年高知県生まれ。東京藝術大学美術学部油画専攻科修了。独立美術協会に所属し、芸術選奨文部大臣賞など受賞を重ね、96年より日本芸術院会員となる。また、2007年には文化功労者に選ばれた。50年以上にわたって精力的に制作活動を続け、日本洋画壇を代表する作家の一人として活躍している。

開催日時：2008年1月27日（日）13：00－16：30
参加者：12名
対象：小学校4～中学校3年生
参加費：500円
場所：別館3階多目的ルーム、企画展示室2Eほか

アーティスト・ワークショップ 7

奥谷 博（おくたに ひろし） 画家

概要 / 洋画家の奥谷博氏を講師に迎え、国立新美術館やその周りの景色を描きました。

使ったもの：白画用紙、色画用紙、水彩絵具、カラーペン、オイルパステル、色鉛筆、鉛筆、折り紙など

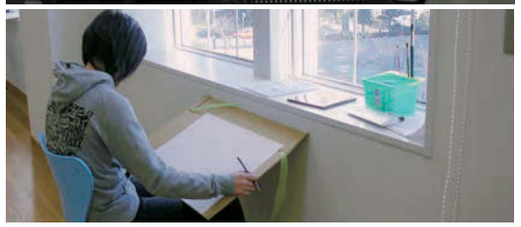
● プログラムの内容と流れ

1. 「旅」展を鑑賞（15分）
奥谷さんの作品が出品されている「『旅』展―異文化との出会い、そして対話―」を鑑賞し、作品の前でお話を聞きました。

2. 別館3階多目的ルームに移動（10分）
展示室を出て、美術館の建物をよく見ながら、多目的ルームへ戻りました。この日は快晴。陽光に輝くガラスのカーテンウォールがとてもきれいでした。

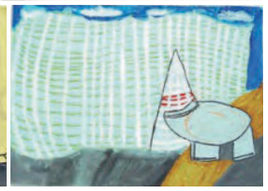
3. 講師のお話（15分）
奥谷さんの作品のスライドショーを見ながら、絵を描くときのポイントについてお話ししていただきました。
今日の制作のポイントは3つ。「自分が感じたまま、自由に描く」「色や形も、感じたままに変えていい」「特に印象に残ったところは、形や色など強調してみる」

4. 制作（120分）
別館3階から見える景色の中で描きたい場所を探し、場所が決まったら、画用紙を選んで制作開始です。
自分らしい表現を目指して、画材や描き方を工夫しながら、みんな真剣に絵と向き合っていました。



5. 作品発表（25分）
出来上がった作品をみんなの前で発表。
「紙の色をよく活かしているね」「ガラスの曲線と壁の格子模様のコントラストがすばらしい」奥谷さんから、作品一つひとつにコメントをしていただきました。

「自分らしい表現」にあふれた作品がたくさん生まれました。子ども画伯たちの力作は、翌日、企画展示室2Eの



「旅」展のショップスペースにて展示され、訪れた人々の目を楽しませてくれました。

● まとめ
冬晴れの日曜日、開館一周年を迎えたばかりの国立新美術館で開催されたのは、「旅」展（2007年12月15日（土）～1月28日（月））に出品していた奥谷さんのワークショップ。会場となった多目的ルームの窓からは、国立新美術館や東京タワー、政策研究大学院大学などさまざまな建築物が見えます。「ここから見える風景を、自分らしく自由に描いてみましょう」という奥谷さんの言葉を受けて、子どもたちは色のついた紙を使ってみたり、印象に残った色や形を強調してみたり、工夫を凝らして個性的な作品を完成させました。（NY）

● 参加者の感想
・今までは、外から見たそのまましか描いたことがなかったけれど、今日は中を見ていて思った事を絵に描き表すことができました。これからは、自分が思うままに、感じたままに描くことができると良いです。（13歳 / 女子）
・水彩絵具と色えんぴつの両方を使いました。木を水色にしたのが工夫です。美術館のガラスにうつっている虹や現実とちがう世界をかけたのが、とても良くできたと思う。（10歳 / 女子）
・オイルパステルが絵具をはじく性質を利用して、枯葉や木を描きました。紙の色を使って夕焼けをひょうげんしました。そして、今日は楽しい日になりました。（10歳 / 男子）
・「曲がった絵」をかいて、とても楽しかったです。お話の中にも役に立つことがたくさんあって、とても良かったです。（12歳 / 女子）
・美術館の絵はむずかしかったけど、上手くできました。これからも絵を描くのをつづけていきたいです。（11歳 / 女子）

8

「くんくんウォーク
～美術館のにおいを探せ！～」

講師プロフィール / 1974年生まれ。1999年女子美術大学大学院美術研究科版画専攻修了。2005年文化庁芸術家在外研修員として1年間ニューヨークに滞在。帰国後も、国内外で精力的に活動している。五感を刺激するインスタレーション作品を制作し、主に香りの効用から来場者の記憶を刺激し、回想を促す心地よい空間に特徴がある。

開催日時：2008年2月16日（土）13：00－17：30
参加者：29名
対象：4歳以上（小学生未満は保護者同伴）
参加費：500円
場所：別館3階多目的ルーム、国立新美術館内

アーティスト・
ワークショップ 8

井上尚子（いのうえ ひさこ）　アーティスト

概要 / 国立新美術館の展示室やカフェ、レストラン、バックヤード、防災センターなどを、「におい」をキーワードに探索。
見つけだしたにおいを、色や形に置き換えて、「くんくんマップ」を作りました。

使ったもの：くんくんブック、A1サイズの館内マップ、水彩絵具、カラーペン、色鉛筆、芳香剤3種（レモン、グレープフルーツ、オレンジ）、においのボトル5種（鉛筆削りカス、コーヒー、クッキー、葛根湯、シナモンパウダー）など

● プログラムの内容と流れ

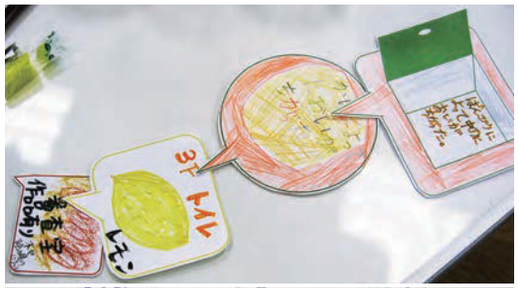
1. 受付後、「においのくじ」を引いてグループ分け
鼻を使ったウォーミングアップ。中身の見えない5種類のボトルを嗅ぎ比べ、好きなにおいを一つ決めて席に着きます。においの趣向が同じ人同士がグループになります。

2. 講師のお話（40分）
ご自身の作品と、においの奥深さについてお話を聞きました。そしてここで、ウォーミングアップで嗅いだボトルの中身が明かされました。鉛筆の削りカス、コーヒー、葛根湯…。よく知っているはずなのに、見えないと違うにおいに感じられると驚きの声があがっていました。

3. 館内を探索（120分）
黄色いTシャツを着たくんくんリーダーと共に、館内をまわるための指示が書かれた「くんくんブック」を持って出発！
・地下1階バックヤードスペースの作品整理室には展示される前の作品が一時的に置かれています。普段は入ることができない美術館の裏側。彫刻作品はどんなにおいがするかな？
見つけ出したにおいは、「くんくんブック」に色や形で書き込みます。

・地下1階にあるミュージアムショップでは、好きなにおいの商品と苦手なにおいの商品をそれぞれ探します。
・ロッカーだってくんくん。一つひとつ違うにおいがします。いったい何が入っていたのか、色々な意見が飛び出しました。
・2階にあるカフェで出しているお菓子を食べました。においをくんくん嗅いで、どれを食べるか決定。どんな味がするかな？
・インフォメーションのお姉さんには、どんなにおいが好きかインタビュー。
・「メディア芸術祭」の展示室では、“においのしそうな作品”を探しました。水色が印象的な映像作品からはプールのにおいがしそう、という意見も。

4. 多目的ルームに戻ってきたら、「くんくんマップ」制作（60分）
館内で見つけ出したにおいは、色や形に置き換えて、用意された吹き出しに表現します。巨大な館内地図上に、見つけ出したにおいの吹き出しを貼り付けていきます。



5. 発表（30分）
グループごとに、見つけ出したにおいや感じたにおいを

発表しました。同じ場所でも、人それぞれ感じ方が異なることが分かりました。

● まとめ
展示室やレストラン、ミュージアムショップ、アートライブラリーといったパブリックスペースだけでなく、防災センターや作品整理室といった普段は訪れることのない美術館の裏側にも足を運びました。また、美術館で働くさまざまな人にインタビューを行うことで、国立新美術館の機能や役割を幅広く知る機会ともなりました。鼻を敏感にさせてにおいを嗅いだり、作品からにおいを想像したり、食べ物を味わって香りを楽しんだりと、さまざまな方法でにおいに親しむと共に、「におい」という実体のないものから想像力を駆使して色や形などで表現することにも取り組みました。普段何気なく使っている嗅覚を意識的に使ったワークショップを通して、目には見えないにおいの奥深さを体験することができたのではないでしょうか。（AT）

● 参加者の感想
・記憶とにおいが直結し、鑑賞に影響を与えることを知り、とても楽しかった。（30代男性）
・目で見る美術館はあたり前だが、鼻で感じるのは意識したことがなかったので新鮮だった。（40代男性）
・「におい」というものから、想像力を働かせるとはユニークな発想だと思います。子どもたちの想像力を豊かにさせる企画で良かったと思います。（30代女性）
・子どもが楽しんで美術館を体験できたので良かったと思います。日本の美術館は、外国と違って「子どもに優しくないイメージ」があり、なかなか子どもがいると行きづらい場所です。それを楽しく遊びながら見てまわれたので、良いきっかけになりました。（30代女性）

9

「ヒューマンサイズ・プロジェクト ～つくろう！自分サイズのバルーン！～」

「アーティスト・ファイル2009―現代の作家たち」展 関連企画

講師プロフィール / 「アーティスト・ファイル2008」展出品作家。1971年生まれ。多摩美術大学大学院美術研究科彫刻学科諸材料専攻修了。形や場所の定まらない、時間とともに推移していくエフェメラルな作品を多く制作。「アーティスト・ファイル2008」展では、特殊な透明フィルムで造型したバルーンの中にヘリウムガスを満たした「浮遊」のインスタレーションを展示した。

開催日時：2008年3月15日（土）、16日（日）13：30－16：00
参加者：46名（15日：19名、16日：27名）
対象：子どもから大人まで
参加費：無料
場所：講堂、研修室ABC、竹林

アーティスト・ワークショップ 9

市川武史（いちかわ たけふみ）　現代美術家

概要 / 「浮遊する彫刻」を制作する市川武史さんを講師に迎え、自分の身長と同じ長さのバルーンをつくり、それにタイトルをつけて展示しました。最後に、市川さんと一緒に作品を巡るツアーを行い、参加者は自分の作品に込めた熱い思いを語りました。

使ったもの：特殊フィルム、ヘリウム、ビニールひも、てぐす、テープ、キャプションカード、ペンなど

● プログラムの内容と流れ

1. ワークショップの内容、作業手順に関する説明（15分）

2. 制作（50分）
● ひもで身長を測る
メジャーでなく、ひもで身長を測るのは、なかなか新鮮。
● バルーンに自分の身長の印をつける

● ヘリウムを充填し、印のところで縛る。余分なフィルムを切り取る。

3. 展示（20分）
● 展示場所を選ぶ
参加者は講堂や講堂近辺の廊下、研修室、竹林などで、バルーンを椅子や竹林の竹にくくりつけ、細部にまでこだわりながら設置しました。

● 作品名をつけ、キャプションを設置
自分の名前や、「真」、「成長」といった抽象的な言葉、「脱出」「かぐや姫の宇宙船」など詩的なもの、さらには「ジョシアナ」といったユーモアたっぷりのものまで、参加者一人ひとりがセンスの光る面白いタイトルを付けました。

4. 鑑賞ツアー（60分）
参加者が自分の作品について説明するツアーを開催。市川さんとの楽しい対話や、他の参加者の意外な意図を聞き、刺激的で楽しいツアーになりました。

● まとめ
「アーティスト・ファイル2008」展（2008年3月5日（水）～5月6日（火・祝）開催）に出品していた市川さんの展示に関連して開催されたワークショップ。参加者が作った透明なチューブ状のバルーンの違いは、長さだけ。姿形が似ているわけではないのに、自分の等身大のバルーンは、なぜか自分の分身のような気がしてきます。バルーンに強い愛着を感じた参加者たちは、それに自分なりの意味を込め、創意を凝らして展示しました。
このワークショップの重要なポイントは、最後に、参加者が展示したバルーンを市川さんと回ったツアーにもあります。市川さんは、参加者一人ひとりから、熱心に作品の意味や展示の意図を聞き出しました。その対話を通して、参加者は、作品の造形だけではなく、作家がそこに込めた意味や展示の方法も美術において重要な要素であることを実感しました。
事前申込制ではなく、ぶらりと立ち寄った人たちも気軽に参加することができた今回のワークショップ。全国各地から、子どもから60代まで幅広い年代の方にご参加いただきました。（YM）

● 参加者の感想
・参加者それぞれの中にある“アーティスト魂”を感じ、楽しかった。他の参加者のタイトルを聞いて、なるほどと思った。（40代男性）
・童心に返ってとても楽しかったです。時間も忘れるほど熱中してしまいました。設置場所にも、他の参加者のセンスのよさに感心しました。空間も作品の内なんですね。忙しさのため忘れていた人間らしさや心の余裕を取り戻せた感じがします。（40代女性）
・奈良から東京に遊びに来ていて、まさかこのような体験ができると思っていなかったので、うれしかった。（10代男性）

平成20(2008)年度

10

「空想の場所をつくってみよう」

「アーティスト・ファイル2008—現代の作家たち」展 関連企画

講師プロフィール / 「アーティスト・ファイル2008」展出品作家。1977年金沢市生まれ。ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジスレイドスクール・オヴ・ファインアート修了。国内外で数多くの展覧会に出品。幻想的な映像作品を多く手がける。ロンドン在住。

開催日時：2008年4月12日（土）13：00－16：30
参加者：11名
対象：8～15歳まで
参加費：500円
場所：別館3階多目的ルームほか

アーティスト・ワークショップ 10

さわ ひらき 現代美術家

概要 / グループに分かれた子どもたちが共同で空想の街のオブジェを制作。アニメーション化されたそれらの場所の映像に合わせて、身近な物で音楽をつけて発表し、映像作品を作りました。

使ったもの：スチレンボード、画用紙、カラーペン、古着、雑誌、おもちゃ、ひも、ストロー、竹ひご、紙コップ、毛糸、わた、ビデオカメラ、プロジェクター、パソコン、DJミキサーなど

● プログラムの内容と流れ

1. ワークショップの内容、作業手順に関する説明（15分）

2. 「アーティスト・ファイル2008」展の作品鑑賞（45分）
真っ暗な展示室の床に置かれた6つのスクリーンに映し出される映像によって、不思議な時空間を創出するさわさんの作品《Hako》を鑑賞。海の波しぶき、壁にかけられた振り子時計など、一つひとつの場面はどれも見慣れた風景なのに、さわさんの手にかかると非日常的な空間に変貌します。子どもたちは現代美術の面白さに触れ、大興奮。

3. 制作（90分）
子どもたちは3グループに分かれ、スチレンボードで区切られた3つの空間に、それぞれ空想の場所を作りました。CDを紐に通して空からぶら下げたり、天使を飛ばしたり。大きな橋をかけたり、恐竜のような新しい生き物のオブジェを作ったり。皆、その空間に必要だと思うものを思い思いに作り、全く異なる3つの場所ができました。

4. 映像投影・作品発表（45分）
3つの場所のオブジェを、協力者の鷲尾友公さんがパソコンとDJミキサーを用いてアニメーション映像に変換。同じくさわさんの協力者でサウンド・アーティストのデール・パーニングさんと一緒に、ビーズやビー玉など身の回りにある物で音を作りあげ発表しました。

子どもたちが発表した作品を後日、さわさんがさらにアレンジ。DVDに収録し、参加者に郵送しました。

● まとめ
「アーティスト・ファイル2008」展（2008年3月5日（水）～5月6日（火・祝））に映像作品を出品していたさわさんのワークショップは、本格的な機材や技術スタッフを動員し、さわさんの制作過程を垣間見るような内容のものでした。
初対面の人たちと共同で作品をつくることに対して、最初は少し恥ずかしそうにしていた子どもたちですが、一人ひとりが独創的な乗り物や動物などをつくり配置していくうちに、緊張がほぐれ、見たこともないような面白い場所が誕生しました。講師の方々の手によって、動きや時間のある新たなアニメーション映像に生まれ変わった作品に、今度は子どもたちが身の回りにある物を用いて即興で音楽をつけて発表する体験は、さわさんの作品の世界を垣間見るもので、その後の映像作品への接し方が変化する新鮮なものでした。（YM）

● 参加者の感想
・でんしゃをうまく作れたとおもいます。さいごの音を鳴らすのはすこしむずかしかったです。でもかんばりました。おもしろかったです。（9歳 / 男子）
・音のふしぎがいっぱいだった。ぶたいを作るのがおもしろかった（くみたてたり、ものをとばしたり、たのしかった）。（9歳 / 女子）
・最初は空間とはどういうものかと考えていたら時間がすぎていきましたが、自由に物を作り置いてみたら、なぜだか空間という物をつかめたような気がしました。（11歳 / 男子）

11

ミナ ペルホネンでつくる未来生活

プログラム「ミナ ペルホネンとデザイン」(講演会とワークショップの同時開催)

講師プロフィール / 1967年東京生まれ。文化服装学院を卒業後、1995年にブランド「ミナ」を設立。2000年に東京・白金台に直営店をオープン。2004年からパリでもコレクションを発表。2006年毎日ファッション大賞受賞。

開催日時:2008年5月18日(日)13:30−17:00
参加者:20名
対象:子どもから大人まで
参加費:2,000円
場所:別館3階多目的ルーム

アーティスト・ワークショップ 11

皆川 明(みながわ あきら) デザイナー

概要 / 参加者が思い描く未来生活を、ミナ ペルホネンの布を用いて一枚の紙の上に自由に表現しました。

使ったもの:ミナ ペルホネンのファブリック、画用紙、色鉛筆、カラーペン、のり、接着剤、はさみなど

● プログラムの内容と流れ

1. 講師の活動紹介、ワークショップの内容、作業手順に関する説明(30分)

2. 制作(135分)

● 布を選ぶ

まず、皆川さんのカラフルで独創的な布を選びます。過去のものも含め、ミナ ペルホネンがデザインした布が勢ぞろい。それぞれの布をじっくりと観察します。ストライプや水玉は何に変化するのでしょうか。

● 布を切り、画用紙の上にまとめる

皆川さんから、布の制作過程や制作時のエピソードを聞くと、布がより身近に感じられ、想像が膨らみます。自分で描いた絵や思い出の写真を組み合わせる人も。作り始めてから2時間以上経っても、参加者の集中力は途切れませんでした。

3. 発表(30分)

一人ひとりが夢や目標と向き合い、ミナ ペルホネンの布を通して表現された理想の「未来生活」を語りました。「“自然”をキーワードにした作品が多いことが印象的でした」と皆川さん。

● まとめ

SFTギャラリー「minä perhonen TODAY'S ARCHIVES 本日のアーカイヴ」展(2008年4月23日(水)〜6月30日(月))に出品していた皆川さんを講師に迎え、当日は午前中に講演会(250名参加)、午後にワークショップを開催しました。参加者が大人ばかりの午前中とは対照的に、5歳の子どもから大人まで幅広い世代が集まった午後のワークショップは和やかな雰囲気で始まりました。「無駄を出さない」という皆川さんの考えで大切に保管されてきたミナ ペルホネンの布。今ではヴィンテージとして希少価値も高い、過去10年間に作られた布で「未来生活」を表現しました。鮮やかな色彩でミナ ペルホネンの独自の世界観が反映された幻想的なパターンの布は、参加者たちの想像力を強く刺激しました。ユニークなデザインと丁寧に織り上げられた布の魅力によって、参加者たちが希望に満ちた明るい未来像を表現したことが印象的でした。

皆川さんの温かいアドバイスのもと、布に込められた想いを感じながら、参加者が皆、豊かな想像力で理想的な未来についてじっくりと考えたワークショップでした。(YM)

● 参加者の感想

・ミナでつくる未来生活ということで、いったいどんなものができるのか楽しみにしてきました。最後に発表会があったのがとてもよかったです。普段の生活では知り合う機会のない人々の考えや意見を聞けました。同じ材料から違うものができていくのが面白かったです。(30代女性)

・たのしかった。つくるのがおもしろかった。でもなんでおもしろいんだろう。(5歳 / 男子)かなり子どもの自己主張が強く、共同制作にしたかったのに出来ませんでした!子どもの性格が普段と違い、強気な一面を見て驚きました。皆川さんのお人柄に触れ、この方がデザインした洋服を着たら幸せになれそうな思いがしました。

・日ごろなかなか自己回帰する機会がない中、こんなに素晴らしい素材で自分を見つめ、自分を表現することができる機会を得ることができて、とてもうれしかったです。近未来に対する皆さんのイメージもとても心に残りました。(30代女性)

・参加者の意外な発想に驚きました。楽しかったのでまた機会があれば参加したいと思います。(50代男性)

・皆川さんの作った布を見ていると、いろいろな想像がわいてきて、どれもこれも作品の一部として使いたくなりました。自分の未来を考えて物を作るという工作のような時間が久しぶりだったので、熱中する楽しさを久しぶりに感じました。(20代女性)

12

「鑑賞ワークショップ ～ことばで楽しむエミリー展～」

「エミリー・ウングワレー展―アボリジニが生んだ天才画家」関連企画

講師プロフィール / 全盲のマッサージ師として、茨城県水戸市在住。「言葉を介したコミュニケーション」による鑑賞を通じて、見える人も見えない人も一緒に美術作品を楽しむ活動を各所で展開している。

開催日時：2008年7月6日（日）15：00－17：00
参加者：22名
対象：一般
参加費：無料（要展覧会観覧券）
場所：企画展示室2E、講堂

アーティスト・ワークショップ 12

白鳥建二（しらとり けんじ）

概要 / 言葉を介したコミュニケーションを通して、視覚障害のある人もない人も、一緒に「エミリー・ウングワレー展」を鑑賞しました。

● プログラムの内容と流れ

1. 講師のお話（30分）

●講師から、美術館へ行くようになったきっかけや、言葉を介したコミュニケーションによる鑑賞について、ご自身の経験を交えたお話を聞きました。「目が見えている人も、実は見えていないことがあるんです。そして、作品をよく見ることによって気づくことがたくさんあるんですよ」。

今日のワークショップでは、作品を解説するのではなく、作品の印象や感想を伝え合いながら鑑賞を行います。

●少人数のグループに分かれたら、鑑賞へ出かける前に自己紹介。各グループには視覚に障害を持つ方もいます。

2. 「エミリー・ウングワレー展」を鑑賞（60分）

グループ内で相談して鑑賞する作品を決めます。参加者同士が、作品を前にして感じたこと、気づいたこと、そこから想像したことなどを自由に話しながら鑑賞を進めます。

展示室の入口で、大きく写し出されたエミリーの横顔を前に、どんな人物かを話し合うグループ。「意思が強そうな印象を受ける」といった意見も。

エミリー・ウングワレーの作品には、抽象的な表現が多く見られます。《大地の創造》の前では、青や緑色の点の集合が流れを作っている作品の印象から、海底を想像した人もいました。そのコメントを聞いて、あれはワカメかな？海ぶどうにも見えてきた…など笑いが起こる場面も。

何本もの線が引かれた絵を前に、視覚に障害のある参加者から質問。「この絵で描かれている線は、風でたとえるとどんな強さの風ですか？」それを受けて、他の参加者は自分なりの感じ方で風をたとえます。

緑と茶色の印象の強い《雨の後》というタイトルがついた作品を鑑賞したグループでは「雨の後がこんな色なんて意外」というコメントがありました。視覚に障害のある参加者に、タイトルからどんな色を想像するか質問したところ、「緑」との回答が。その理由を尋ねたところ「雨の日の方が、植物のにおいを感じるから。もしくは土の茶色かしら」。

このグループでは、それをきっかけに色のイメージについて話が盛り上がりました。

3. 振り返り（30分）

鑑賞を終えた参加者は講堂に戻り、感想などを伝え合いました。全グループが戻ってきたところで、鑑賞を通して感じたことなどを発表。参加者からは、「面白いと思ったことを言葉で人に伝えることによって、より深く考えることができた」「一人ずつ作品の印象を掘り下げていくことによって、想像の広がりを体験できた」などの感想が寄せられました。

● まとめ

「エミリー・ウングワレー展」（2008年5月28日（水）～7月28日（月））で開催された鑑賞ワークショップは、「話し手」と「聞き手」という関係ではなく、皆が同じ立場で言葉を交しながら作品を鑑賞するプログラムです。言葉を介したコミュニケーションによって鑑賞を深めることを目的としているため、視覚障害の有無に関わらず参加することができます。参加者は、目に見えるものだけでなく、作品の雰囲気や気になったこと、作品をきっかけに想像したことなどを自由に言葉で伝え合いながら鑑賞を行いました。年齢や性別、視覚障害の有無に関わらず、さまざまな人との対話を通して作品を鑑賞することによって、一人では気づかないことに出会い、作品の感じ方や想像する世界が広がる経験となりました。（AT）

● 参加者の感想

・知らなかった人たちとの出会いがとても楽しかった。時間があっという間に過ぎました。自分の気持ちや、感覚的な形のないものを言葉で表すことが興味深かった。（40代女性）

・一方的な説明でなく、会話しながら鑑賞できて良かったです。（女性・視覚障害者）

・エミリーや彼女の作品、オーストラリアの風景を他の参加者と共有しながらたくさん想像できて、また絵を見にいきたくなりました。（女性・視覚障害者）

・自分以外の方の、いろいろな意見や感想が聞けて、おもしろかった。目のみえない方とも絵画鑑賞を共有できることに驚いた。（50代女性）

・普段の美術館鑑賞では体験できないことを体験させていただきました。また、このような視覚障害の方々と普通に出会える体験も貴重で、このようなワークショップを一般に来館されている人々に見てもらえるような機会も貴重だと思いました。（30代女性）

13

「アイスベキモノタチ ～発見！おもしろデザイン！～」

講師プロフィール / 1964年、長崎県生まれ。桑沢デザイン研究所卒業。キヤノン株式会社において「Canon IXY DIGITAL」シリーズなど多くの商品のデザインを手掛ける一方、「SABO STUDIO」として独自のデザイン活動を行う。主な作品に「チューチューシャンデリア」（長崎県美術館所蔵）、「井伊直弼」（ギャルリ・ダウンタウン）、「Watermelon clock」（ギャルリ・ヴィヴィッド、オランダ）などがある。

開催日時：2008年8月24日（日）10：00－14：30
参加者：親子8組21名
対象：小学生以上の親子
参加費：500円 / 組
場所：別館3階多目的ルームほか

アーティスト・ワークショップ 13

清水久和（しみず ひさかず）　プロダクトデザイナー

概要 / 国立新美術館の館内や近辺を探索し、気になる「モノ」（デザイン）をデジタルカメラで撮影。
その中から一点を選び出し、各自がそこに見出したストーリーを文章にまとめ発表しました。

使ったもの：紙、はとめパンチ、はとめ、つづり紐、スキャナー、プリンター、パソコン、プロジェクターなど
参加者持ち物：デジタルカメラ

● プログラムの内容と流れ

1. 講師の活動紹介、ワークショップの内容、作業手順に関する説明（30分）
キヤノンのデジタルカメラのデザインなどを手がける清水さんが、電線と電線を繋ぐ接合の装置、黒板消し、ソーセージの留め金、縄跳びの持ち手など、身近にありながら普段私たちが見過ごしてしまっている工業製品を丁寧に観察し、それらに対して惜しみない愛情を注いでいることがスライドショーで紹介されました。

2. 屋外探索（60分）
私たちにも面白い工業デザインがきっとみつけられるはず！いよいよ、探索へ出発です。国立新美術館近辺の六本木7丁目の裏道を皆で歩き、面白そうなものをカメラで撮影して歩きました。
美術館に戻り、各自写真を1点選びました。

3. 昼休憩（60分）

4. 制作（60分）
参加者は、休憩時間に印刷された写真をもとに、ストーリーを考えます。

5. SFTギャラリー展示見学（30分）
地下のSFTギャラリーで展示されていた清水さんの展示「アイスベキモノタチ」を見学。（その間、スタッフは写真とそれに添えるストーリーを合体させ、全員分を冊子に印刷）

6. 発表（30分）
プロジェクターで投影しながら、全員が自分の作品を発表しました。

● まとめ

SFTギャラリーで「SHIMIZU Hisakazu EXHIBITION アイスベキモノタチ」展（2008年7月2日（水）～9月1日（月））に出品していた清水さんを講師に迎えた今回のワークショップは、ごく身近にあるために、見過ごしてしまいがちな工業デザインを再発見するためのものでした。どのような工業製品にも機能があり、その誕生には偉大な構想が隠れていることに気付かせてくれた清水さん。賑やかな六本木の裏道にある閑静な町並みを探索し、気になった「モノ」に対して自分なりに物語を想像してみるこのワークショップの後、参加者たちは日常の中にある「モノ」に対して温かいまなざしを向けるようになったのではないでしょうか。いつもとは違った視点から「モノ」を見、そこに潜む新たな世界を再発見するきっかけを得たワークショップとなりました。（YM）

● 参加者の感想

・あまり気にしたことのないようなデザインにも、考えられた機能と物語があるのだという事が新鮮でした。弟と一緒に参加しましたが、面白い発想ができるという普段見ることのない一面を知る機会になりました。（20代女性）
・こういうワークショップのような機会はなかなかないものだし、今までとは違う視点で周りを見るのは楽しかったです。（10代男性）
・おもしろかった。写真を一枚にしぼるのがむずかしかった。プリントアウトしたものをもらえて、大満足。もっと家の中の工業製品を見てみたい。（8歳 / 男子、40代両親）

14

「デザインってなんだろう？？
～やってみよう！イスのデザイン～」

講師プロフィール / 千葉工業大学卒業。ロス・ラブグローブのアシスタント・デザイナーを務めた後、ロンドンで独立し、2008年から東京を拠点に活動する。Fritz HansenやGeorg Jensenなどのヨーロッパ・ブランドの製品デザインを手がけ、その美しい形体と機能性を兼ね備えたプロダクトは高い評価を得ている。

開催日時：2008年9月28日（日）13：00－17：00
参加者：29名
対象：小学生
参加費：500円
場所：別館3階多目的ルームほか

アーティスト・ワークショップ 14

紺野弘通（こんの ひろみち）　プロダクト・デザイナー

概要 / 国際的に活躍するデザイナーの紺野弘通さんと一緒に、使う人の気持ちを考えながら、家具のデザインを体験しました。

使ったもの：紙粘土、発泡スチロール、木片、紙筒、カラーダンボール、巻きダンボール、色画用紙、針金、モール、ミラーテープ、毛糸、布、わた、カラーペン、鉛筆、色鉛筆、椅子24種、椅子の製造工程やデザイナーの写真パネルなど

● プログラムの内容と流れ

1. プログラムの概要説明（5分）
いろいろな種類の椅子が並んだ多目的ルームで、ワークショップがスタート。参加した小学生は、好きな椅子を選んで座り、紺野さんのお話を聞きました。

2. 講師の活動紹介（25分）
紺野さんがこれまでに手がけたプロダクト・デザインや、デザインにこめた思いについてお話ししていただきました。「デザイナーは、使う人のことを一生懸命思いながらデザインをする。だから、デザインをするのはみんなの幸せのため」。

3. 館内の椅子を見学（45分）
美術館内に置かれているデザイン・チェアを見学し、実際に座ってみて、座り心地を確かめてみました。さらに、椅子のデザイナーや製造工程、どんな素材で作られているのかなどについて、紺野さんがわかりやすく解説してくださいました。
椅子を見学した後、コンクリートの柱がずらりと並んだ美術館2階の廊下で、紺野さんから今日挑戦するデザインのテーマが発表されました。

「この美術館の柱が並んだ空間に置く、家族のための椅子をデザインしてみよう。」

4. 椅子をデザイン（40分）
別館に戻ったら、まずは椅子のデザイン画を描きます。床一面に敷かれた紙に、自分の家族のことを思い、どんなふうに使ってもらいたいかを一生懸命考えながら椅子のデザイン画を描きました。

5. 椅子のミニチュアを制作（80分）
デザイン画が描けたら、紙粘土や針金、木片、布などを使って、デザインした椅子の小さな模型を作りました。模型を作ってみると、思いどおりの形にならなかったり、うまく立たなかったり、椅子のデザインの難しさがよくわかります。紺野さんにアドバイスをもらいながら、形や強度を修正して、世界に一つだけのミニチュア椅子の完成です！

6. 作品発表（30分）
完成したミニチュア椅子を、柱が並んだ国立新美術館のロビーに見立てた発表台の上に置いて、参加した全員の前で発表しました。家族みんなで景色を見るための椅子、お母さんと赤ちゃんが一緒に座れる椅子など、家族を思ってデザインした力作がたくさん生まれました。

子どもたちがデザインしたミニチュア椅子は、国立新美術館1階ロビーで一週間展示され、訪れた人々の目を楽しませてくれました。

● まとめ
「デザインは、みんなの幸せのためにするもの」。紺野さんのそんな言葉から始まったワークショップでは、小学生が家族のための椅子のデザインに挑戦しました。紺野さんのお話を聞き、さまざまな椅子を見学した子どもたちは、一つひとつの椅子が使う人のことをよく考えてデザインされていることを知りました。そして自分の家族のために、家族の幸せを一生懸命思いながら椅子をデザインし、紙粘土や布を使って独創性あふれるミニチュア椅子を制作しました。（NY）

● 参加者の感想
・今日はすごく考えてなやんだけどおもしろかったです。（6歳 / 男子）
・もけいを作るのがたいへんだったけど、たのしかった。（8歳 / 女子）
・いろいろなデザインのことを知ったし、美術館を回ったのでよかった。（9歳 / 女子）
・自分で思い切り絵をかいて、思いどおりのものができてうれしかった。またやりたい。おもしろいデザインのいすにすわれてよかった。（9歳 / 男子）
・サイドテーブルをつけるのがたいへんだったけど、はりがねを使ってつけることができてよかったです。くずれてきてしまったので、バランスが難しかった。（12歳 / 女子）

15

「六本木をつづる
～散策を“手紙”にたくして～」

講師プロフィール / 1971年兵庫県生まれ、神奈川県在住。国内外のさまざまな土地を巡りつつ、その時の思いや出来事、出逢いなどを、色とりどりの縫い目に込めて、歩いた道のりの中に表現している。

開催日時：2008年12月21日（日）10：30－16：00
参加者：20名
対象：小学生から大人まで（小学生は保護者同伴）
参加費：500円
場所：別館3階多目的ルームほか

アーティスト・
ワークショップ 15

秋山さやか（あきやま さやか）　美術作家

概要 / 街を散策するフィールドワークを行った後、散策を通して収集した素材や気づいたことなどを取り入れて、さまざまな表現で「手紙」を制作しました。

使ったもの：色紙、和紙、布、水彩絵具、色鉛筆、オイルパステル、カラーペンなど

● プログラムの内容と流れ

1. グループ分け
受付を済ませた参加者から、用意された封筒を1枚引き、中に入っている国立新美術館のポストカードの絵柄に従ってグループに分かれます。

2. 講師の活動紹介およびワークショップの説明（20分）
「普段見過ごしてしまいがちな街の様子を、いつもと違う視点でとらえて、いろいろなものや事に出逢ってください」と秋山さん。

3. 街歩きの計画を相談（15分）
グループごとに集まってリーダーを決めたら、地図を頼りに六本木のどの方面を散策するか相談します。一日がかりのワークショップとなるため、昼食をどこで取るかも考えます。

4. 街を散策（140分）
緑豊かな青山公園方面へ向かうグループもあれば、古くから続くお店が軒を連ねる麻布十番方面でグルメを楽しむグループも。六本木の裏道を中心に散策したグループは、マンションの壁に施されたモザイク画に目を留めたり、裏路地にたたずむ猫と触れ合ったり、都会の中に残る古い町並みの風情を楽しんでいました。
普段何気なく通り過ぎてしまう街や通りも、何かを探そうとする意識を強く持って歩くと、さまざまな発見があります。

5. 散策の振り返り（20分）
散策から帰ってきたグループから、お茶で一息。散策してきた場所や街中で発見したこと、収集したものなどを見せながら散策を通して決めたグループ名を発表しました。

6. 制作（90分）
散策の思い出を伝えたい相手のことを考えながら、散策を通して気づいたことや収集したものを取り入れて「手紙」を作ります。集めた葉っぱや木の実、お店のチラシ、古い雑誌といった素材だけでなく、中にはランチが入っていた容器を使う人も！

7. 作品発表（30分）
完成した作品を披露すると共に、散策を通して気づいたことや心に残ったことなども発表しました。それぞれの視点で語られる散策の感想や作品発表に、参加者は皆、聞き入っていました。

8. 展示（2009年1月7日（水）～12日（月・祝））
ワークショップで制作した作品は、国立新美術館の地下にあるSFTギャラリーで展示されました。

9. 発送
散策の思い出が詰まった作品は、展示を終えた後、発送されました。

● まとめ
ワークショップ当日は、暖かな日差しの絶好の散策日和となりました。国内外のさまざまな土地を巡り、そのときの思いや出来事、出逢いを取り入れて作品を手がける秋山さんから、最初にこれまでの滞在制作の話を聞くことで、参加者はさまざまなものに気を配って街を歩くイメージを持って散策に出かけました。見過ごしてしまいがちな街の様子も、いつもと違う視点で見つめることで、思いがけない発見がありました。散策を経て参加者が制作した手紙は、SFTギャラリーでの展示が終了した後に家族や友達、自分自身に宛てて発送されました。思いが詰まった手紙が時間を経て誰かの手元に届いたところで、ワークショップは完結しました。（AT）

● 参加者の感想
・日ごろ、注意深く周りを見ているつもりが、やはり時間をかけてみると何かを発見したときの喜びが違いました。それが数人で行動すると倍増でした。（20代女性）
・六本木の町並みをいろいろな発想をしながら歩くというのは、とても楽しい出来事でした。日常の中で少し視点を変えて散歩をしてみようかなと思い始めました。（50代女性）
・初めての体験に年甲斐もなくワクワクして地元にかえっての話題が出来ました。作品の作り方も何もわからなかったですが、アドバイスをいただき下手ながらも完成させる事が出来、満足感でいっぱいです。（70代女性）
・初めてこのようなワークショップに参加しました。ただ街を歩くだけでなく、このように作品にすることで、歩いている間にも周囲をよく見まわしたり、今日一日で出会ったものを思い返したりして、とても楽しかったです。（20代女性）

16

「作ろう！オリジナル・モビール」

講師プロフィール / 1974年東京生まれ。和光大学経済学部卒業後、桑沢デザイン研究所夜間部を卒業。1998年に株式会社イデーに入社。定番商品及び、特注家具のデザインを手がける。2005年に退社後は、shigeki fujishiro designを設立し、小物から家具のデザインまで幅広い活動を行っている。

開催日時：2009年2月14日（土）13：00－17：00
参加者：22名
対象：一般（中学生以上）
参加費：500円
場所：別館3階多目的ルーム

アーティスト・ワークショップ 16

藤城成貴（ふじしろ しげき）　プロダクトデザイナー

概要 / プロダクトデザイナーの藤城成貴さんを講師に迎え、ワイヤーとビニールテープを素材に、空気に揺れるモビールを作りました。

使ったもの：ワイヤー、カラービニールテープ、てぐす、ペンチ、はさみなど

● プログラムの内容と流れ

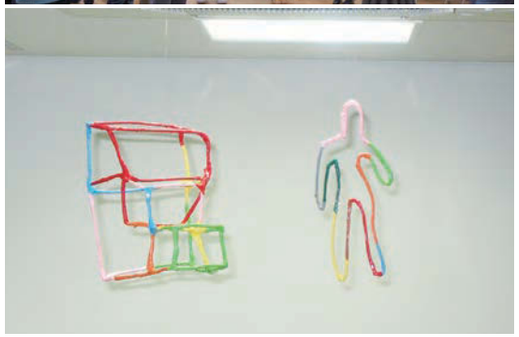
1. 講師の活動紹介（20分）
藤城さんが手がけたプロダクトを前に、使う人のことや設置場所を意識するといったデザインのポイントについてお話を聞きました。

2. 作業手順の説明（20分）
モビール作りの素材となるのは、ワイヤーとビニールテープ。最初に、藤城さんが単純な形をデモンストレーションで作ってくれました。

3. モビール制作（170分）
どんなデザインのモビールを作りたいか、イメージが固まったら制作に取りかかります。ペンチを上手く使いながら、太めのワイヤーを折り曲げたり、伸ばしたりして、形を整えていきます。

一本の線であるワイヤーで、立体を作るのは意外に難しい。藤城さんにアドバイスをもらいながら作り進めます。白い一本のワイヤーが、独創的な形を作り出していきます。個々の形ができたら、バランスを調整しながらてぐすでつなぎ合わせます。

4. 作品発表（30分）
完成したモビールを天井から吊り下げて、皆で鑑賞しました。透明なてぐすでつなぎ合わされたモビールは、離れて見ると宙に浮くカラフルな「線」のよう。一人ひとりのこだわりが詰まった作品が天井を彩りました。



● まとめ
国立新美術館の地下にあるSFTギャラリーで開催されていた「FRAMES」展（2009年1月14日（水）～3月16日（月））にモビール作品を出品した藤城さんを講師にお迎えしました。藤城さんが展示したモビールは、細い木を組み合わせて立体的に造形されています。透明な糸でつなぎ合わされたモビールが、空気の動きに合わせて揺れる様子は、宙を彩る鮮やかな線のようです。そんな藤城さんが今回のワークショップのために提案したモビール作りの素材は、ワイヤーとビニールテープでした。参加者はモビールの設置場所やモビールを贈りたい相手のことを考えながらデザインに取り組み、シンプルな素材を用いながらさまざまな工夫をこらして個性的なモビール作品を作り出しました。（AT）

● 参加者の感想
・モノを作ること自体も楽しかったのですが、周りの全く知らない人と話したり、プロのデザイナーの方とお話しできたり、モビールだけじゃなくたくさんお土産を持って帰れたかなと思います。（10代女性）
・若い方々に混じって、青春時代を思い出したような感じです。（70代男性）
・普段は使わない素材で、3時間も集中し、ものづくりができたことは、とても良い体験でした。最後の発表をみて、ワイヤーとビニールテープだけでこんなに色々な形ができることに感動しました。（30代女性）
・久しぶりの「何も考えずに作る」という体験だったので、すごく充実した時間でした。てぐすを結ぶ作業は大変でしたが、出来上がったときの感動もひとしおです。同じ材料でこんなにもさまざまな個性的な作品を見れて楽しかったです。発想を大切にすることを改めて感じました。「作ること」が楽しいという原点に戻れました。（20代女性）

17

「ミニチュア・ムシワールド ～虫からみた世界をつくろう～」

「アーティスト・ファイル2009—現代の作家たち」展 関連企画

講師プロフィール / 「アーティスト・ファイル2009」展出品作家。1950年新潟県生まれ。金沢美術工芸大学と東京藝術大学大学院で彫刻を専攻後、1970年代末にメキシコ国立エスメラルダ美術学校で学ぶ。1982年に渡米し、以来カリフォルニア州パサデナを拠点に、木や石などを素材とした彫刻作品を制作している。

開催日時：2009年3月8日（日）13：30－16：30
参加者：17名
対象：小学生
参加費：300円
場所：別館3階多目的ルーム、企画展示室2E

アーティスト・ワークショップ 17

大平 實（おおひら みのる） 現代美術家

概要 / 参加者が持参した廃材を用いて、虫の視点から見たときの世界を想像し、立体作品を制作しました。

使ったもの：紙、ペン、布、古着、針金、のり、テープ、はさみ、カッターなど
参加者持ち物：空き箱、不用品

● プログラムの内容と流れ

1. 「アーティスト・ファイル2009」展で大平さんの作品を鑑賞（25分）
展示室で大平さんの作品を時間をかけてじっくりと鑑賞。不思議なかたちをした巨大な作品を前に、「自分が小さくなったみたい！」という声や、「これはどうやって持ってきたんですか？」といった質問が飛び交いました。

2. 作業の説明と制作（110分）
子どもたちは自分が家から持ってきたものを見せ合いながら、虫が見た世界をどのように作るのか考えました。お菓子や薬の箱、卵のパック、リボン、CDなどさまざまなものがありました。
「材料をどうやって使おうかな」と迷っていると、大平さんが、制作のコツを教えてくれます。「花の周りにはどんな虫がいる？」「いろいろな素材を組み合わせてみよう」と子どもたちにアイデアを示しつつ、様子を見守ります。
卵のパックに布を貼り付けて、虫のベッドを作ったり、お菓子の容器やペットボトルを虫の住む部屋にしたり、皆真剣に、独創的な世界を築いていきました。

3. 発表（30分）
普段何気なく捨てられてしまうものが、子どもたちの手によって、ユニークな作品に変身しました。箱の中に虫が住む世界を作ったり、乗り物の形や家の形を作ってみたり。子どもたちの工夫と想像力がたくさん詰まった作品が出来上がりました。

● まとめ
森や砂漠などで拾った木片や樹皮、そして廃材などを素材にしつつ、それを生命力に満ちた有機的な彫刻作品に転換させる大平さん。「アーティスト・ファイル2009」展（2009年3月4日（水）～5月6日（水））に出品していた大平さんを講師に迎えたワークショップの素材は、やはり廃材でした。
ゴミとして捨てられる運命にあるものからどのような表現ができるのか。そして、普段の自分の視点とは異なるところから世界を見たら、どのように見えるのか。しかもそれが、虫という小さなものだとしたら？ この二つの問いは一見異なるようですが、共に「視点」をずらすことを促します。実際には見えない光景を想像し、「物」本来の機能とは異なる、新たな価値を付与して作品化する——このワークショップは、それを体験するものでした。
想定された役目を果たし、ゴミとして捨てられる運命にあるものが、子どもたちの豊かな想像力によって新たな生を得、生き生きとした作品に生まれ変わったのが印象的でした。（YM）

平成21(2009)年度

18

「石から生み出すいろいろなカタチ」

「アーティスト・ファイル2009―現代の作家たち」展 関連企画

講師プロフィール / 「アーティスト・ファイル2009」展出品作家。1952年大分県生まれ。多摩美術大学で彫刻を学び、同大学大学院を修了。一貫して石を素材とした作品を制作し、石の本質や造形の可能性について追求を重ね、独自の作風を築いている。

開催日時：2009年4月5日（日）13：30－17：00
参加者：18名
対象：小学校4年生以上
参加費：1,000円
場所：別館3階多目的ルームほか

アーティスト・ワークショップ 18

村井進吾（むらい しんご）　彫刻家

概要 / 石を素材として作品を手がける村井進吾さんを講師に迎え、いろいろな形をした石の断片を使って、立体作品を制作しました。

使ったもの：黒御影石、瞬間接着剤、バイスプライヤー、金づち、ペンチ、万力、軍手、ベニヤ板など

● プログラムの内容と流れ

1. 「アーティスト・ファイル2009」展を鑑賞（30分）
村井さんの作品を鑑賞し、村井さんから、作品に込めた思いや、石と向き合うことの魅力などについてお話を聞きました。

2. 制作（120分）
多目的ルームに戻り、村井さんから石の扱い方を教えてもらったら、いよいよ制作です。材料として用意されたのは、黒御影石の薄い板と村井さんの作品制作の過程で出た何百もの石片。それら石の端材を瞬間接着剤で貼り合わせて、思い思いの立体作品を作ります。

薄い石板はバイスプライヤーやペンチを使って割り、厚い板は金づちを使って砕いて、形を変えます。その石片同士を貼り合わせて、立体作品を作り上げていきます。でも、石はなかなか思い通りになりません。思った形に割れなかったり、重みで折れてしまったり…。参加者たちは悪戦苦闘しつつも、村井さんからアドバイスを受けて、少しずつ立体を積み上げ、自分なりの「カタチ」へと到達していきました。

3. 作品発表（30分）
約2時間、石と真剣に向き合った後、個性あふれる作品が完成しました。
一人ずつ作品を発表し、村井さんからコメントをいただきました。「すばらしい作品が生まれた。石を知ることで、石や彫刻の見方が変わるきっかけになるといいと思う」。石との対峙を通じて、石の魅力とものづくりの面白さを体感するワークショップとなりました。

● まとめ
「アーティスト・ファイル2009」展（2009年3月4日（水）～5月6日（水））に出品していた村井さんがワークショップの素材として選んだのは、やはり「石」でした。硬く、重く、長年扱ってきた村井さんにとっても、手強い相手である石。初めて石に取り組む人にはかなりの難敵です。それでも参加者たちは、村井さんから熱心なアドバイスを受けながら石と向き合い、石の断片から生まれてくるさまざまな形を、自分の作品に組み上げていきました。そして、重厚な石の魅力と参加者の個性が融合したすばらしい作品がいくつも生み出されました。
「石に夢中になった」「難しかったけど楽しかった」。ワークショップを終えた参加者の感想からは、石との対峙を通じて、石の魅力と造形の喜びを知った実感が伝わってきました。（NY）

● 参加者の感想
・石の触感と作ることのむずかしさを体験し、とても楽しめました。理想はとても高かったのですが、なかなか石は手強かった。子どもの作品は本当にスゴかった。大人も頑張らねば。（40代男性）
・思うように作っていくことができなくて苦しいところもありましたが全体としてはとても楽しく、めずらしく集中して物を作ったなと思いました。難しかったけど楽しかったです！！（40代女性）
・その辺に落ちている石でも作ってみたくなりました。今後何か作るときは、しばられず、自由にし、見る時は作者の気持ちや考え方なども考えていきたいです。（11歳 / 男子）
・難しくて面白い一日でした。（20代女性）
・石はとてもかたくてなかなかわれないけど、とてもきれいにできてよかったです。楽しかったです。（9歳 / 男子）

19

「やってみよう、美術体操 ～名画、名作を体感！～」

講師プロフィール / 1979年静岡県生まれ。世界の名画、名作を再現する「日曜美術シリーズ・まがゐもの美術作品キット」シリーズを制作。静岡県立美術館を会場に、ロダンの彫刻を模した体操ワークショップ「ロダン体操」を考案するなど、通常の鑑賞とは一味違った、身体を使った芸術鑑賞を提案する活動を展開している。

開催日時：2009年8月22日（土）13：30－16：30
参加者：13名
対象：小学生
参加費：300円
場所：別館3階多目的ルーム

アーティスト・ワークショップ 19

高橋唐子（たかはし とうこ）　美術作家

概要 / スライドで11点の美術作品の鑑賞を行った後、鑑賞した作品から着想を得て体操の動きを考え、音楽にあわせて身体を動かしました。

使ったもの：ミラーシート、プロジェクター、パソコンなど
参加者持ち物：汗ふき用タオル、飲み物

● プログラムの内容と流れ

1. 講師の活動紹介（10分）
高橋さんが、自ら考案した「ロダン体操」を披露してくれました。ロダンの彫刻に見られる動きが取り入れられています。

2. スライドで作品鑑賞（60分）
ムンクの《叫び》では、高橋さんが「この人は何で叫んでいると思う？」と問いかけると、「忘れ物に気づいたから！」。写楽の大首絵の作品では、力の入った表情や手の動きをみんなで再現しました。平面に映し出された作品を見て、それを自分の身体で表そうとすると、さまざまなことに気づきます。子どもたちからは活発に意見が飛び出しました。

3. 体操創作、練習（90分）
「ラジオ体操」の曲に合わせて、鑑賞した作品の動きを取り入れた体操を考えます。
ブールデルの《弓を引くヘラクレス》では、弓を引き、片足に重心を置いて身体を後ろにぐっと倒すポーズを取り入れました。

4. 発表（10分）
最後に、お父さんお母さんたちの前で、つくり出した体操を披露しました。
ロダンの《考える人》では、思索にふけって座る彫刻の動きを真似したら、両手を上に開き「わかった～！」と発してひらめきのポーズ。

マティスの《ダンスII》では、手を取り合って、回ります。

最後は静かに呼吸を整えて集まり、ダ・ヴィンチの《モナ・リザ》のポーズで優雅に微笑んでフィニッシュ！
子どもたちの独創性にあふれたオリジナル体操に、ワークショップ会場は大きな拍手に包まれました。

● まとめ
身体を使った芸術鑑賞を提案している美術作家の高橋さんを講師に迎えたワークショップは、作品をじっくり鑑賞することから始まりました。高橋さんが選んだ、ムンク《叫び》、ミレー《落穂拾い》、ロダン《考える人》などの名作11点を、作品に見られる「動き」に注目しながら1時間かけて鑑賞。子どもたちは、ポーズを真似たり、登場人物の前後の動きや内面を想像するなど、いつもとは違う方法で作品と向き合い、作品の背景や作家の意図といった、それまで意識しなかった作品の新たな面に思いを巡らせました。鑑賞後には、聞きなれたラジオ体操の音楽にあわせて、作品に見られる人物の動きを参考に、体操を創作。子どもたちの豊かな発想力から個性的な動きが次々に生み出されていきました。視覚的な鑑賞のみならず、動きに注目し身体を通して作品と向き合うことで、新たに創造することの楽しさを体験する機会となりました。（AT）

● 参加者の感想
・美術の見かたが変わっておもしろかったです。これからもやってみたいです。（7歳 / 女子）
・私は、絵を見て身体を動かしたことがなかったので、初めての体験でした。最初は、右手を曲げることがむずかしかったけど、どんどんやるうちに覚えられたので、うれしかったです。また機会があれば、ちがう絵で体操をしたいです。（9歳 / 女子）
・一番楽しかったのは、名画のムンクの叫びです。叫びの顔と叫びの「アァー」と声を出すのがおもしろかった。最後のダ・ヴィンチのポーズが独特で面白かった。名画ラジオ体操をもう一回家でやってみようと思います。（12歳 / 男子）

20

「チャレンジ！抽象画 ～向き合う心、あふれ出る色～」

「光　松本陽子／野口里佳」展 関連企画

講師プロフィール / 「光」展出品作家。1936年東京生まれ。東京藝術大学美術学部油画科卒業。1960年頃より抽象絵画の制作を始め、60年代終わり頃に滞在したニューヨークでアクリル絵具と出会う。1980年代から90年代にかけて、ピンクを主調色とした独自の抽象絵画スタイルを確立した。近年は、緑の油彩作品にも取り組んでいる。

開催日時：2009年9月12日（土）13：00－16：00
参加者：21名
対象：一般
参加費：300円
場所：別館3階多目的ルームほか

アーティスト・ワークショップ 20

松本陽子（まつもと ようこ）　画家

概要 / 抽象絵画の制作を行う松本陽子さんを講師に迎え、さまざまな描画材料を用いて「抽象画」をテーマに描きました。

使ったもの：画用紙、水彩絵具、オイルパステル、鉛筆、色鉛筆、カラーペンなど
参加者持ち物：個人的に使用したい描画材料

● プログラムの内容と流れ

1. 「光」展を鑑賞（15分）
松本さんの作品が展示されている「光」展を鑑賞。
独特の手法で描かれた絵を前に、松本さんから作品に込めた思いなどについてお話を聞きました。

2. 講師のお話（15分）
「何もないところ、何のイメージもないところから突然抽象画は生まれません。抽象画の作家たちは、この世界に現実にあるものを手がかりに抽象化したのです」。カンディンスキー、ロスコ、ポロックらの作品を紹介しながら、現代までの絵画の歴史についてお話を聞きました。

3. 制作（110分）
参加者は、用意された四つ切サイズの画用紙に、水彩絵具や色鉛筆、カラーペンといった描画材料を使って「抽象画」に挑戦しました。
「難しいとか、こんな絵を描いたら恥ずかしいとか思わずに、自由に色を使って描いてください」と松本さん。

自分の心と向き合って、画用紙に描き進めます。

絵を描くのは久しぶりという参加者も。悩んだときには、松本さんからアドバイスをもらいます。

4. 作品発表（30分）
約2時間の制作で、何枚も描いた人もいれば、時間をかけて1点完成させた人もいました。「自分を思い切り表現できていて素晴らしかった。これからも描き続けていくことが大切です」。松本さんからのメッセージでワークショップは幕を閉じました。

● まとめ
「抽象画」がテーマとなったワークショップには、10代から70代までの幅広い年代の参加者が集まりました。数十年ぶりに絵を描くという緊張気味な参加者もいる中、実際に「光」展（2009年8月19日（水）～10月19日（月））で作品を鑑賞し、松本さんから抽象画についてのお話を聞いた後、参加者それぞれが自分の気持ちを色や形、線などに自由に置き換えて描きました。具体的なものを写実的に描く具象画とは異なる抽象画。参加者は初め少し戸惑いながらも、真っ白な紙の上に、太い刷毛で線を引いて指でのばしたり、オイルパステルを塗り重ねて爪で削って表情をつけたり、一度丸めて皺をつけた紙に描くなど、思い思いの方法で取り組みました。自身の心とじっくり向き合い、湧き出てきた色や形を存分に表現した作品は、どれも力作ばかり。「抽象画」の制作を通して、あらためて自由に描くことの楽しさを体験する一日となりました。（AT）

● 参加者の感想
・とても楽しく描くことができました。抽象画というと難しいものと思っていましたが実際に描いてみて、また、先生のコメントを聞いて、身近に感じました。（50代男性）
・作家の方と、共に時間を過ごせたこと、とてもうれしいです！心にある風景も絵にしていいんだな～とたいへん勉強になりました！（40代女性）
・さまざまな人の絵が見られたこと、人と一緒に絵が描けたことがとても楽しかったです。松本先生と会話しながら絵が描けたことも良い思い出になりました。（30代女性）
・松本先生のコメントや、先生と交流できたことに大変感激いたしました。お人柄に触れいろいろな刺激を受けました。（30代女性）
・小学校以来のことで大変楽しく過ごせました。色々な点で初めて聞くことが多く、勉強になりました。暇をみてまた描きたいと思います。（60代女性）

21

「とらえよう、レンズの向こう側 ～デジカメで撮る抽象写真～」

講師プロフィール / 東京生まれ。大学で絵画を学んだ後、日常と記憶をテーマに、写真を使った平面作品を中心に制作活動を行う。国内での個展の他、グループ展に多数参加すると共に、フランスやドイツ、アメリカ、セルビアなど、海外でのグループ展にも参加。

開催日時：2009年12月19日（土）13：30－16：30
参加者：19名
対象：一般（小学校4年生以上）
参加費：500円
場所：別館3階多目的ルームほか

アーティスト・ワークショップ 21

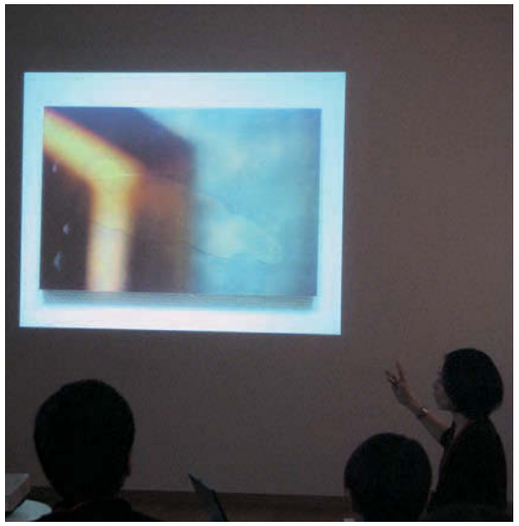
浜田 涼（はまだ りょう） 美術作家

概要 / デジタルカメラを使って、手ぶれやぼかしを用いたり、ユニークな構図を探すなどして、普段の撮影とは異なる視点で世界をとらえ、「表現」としての写真に挑戦しました。

使ったもの：印画紙、画びょう、フォトフレーム、プリンター、パソコン、プロジェクターなど
参加者持ち物：デジタルカメラ

● プログラムの内容と流れ

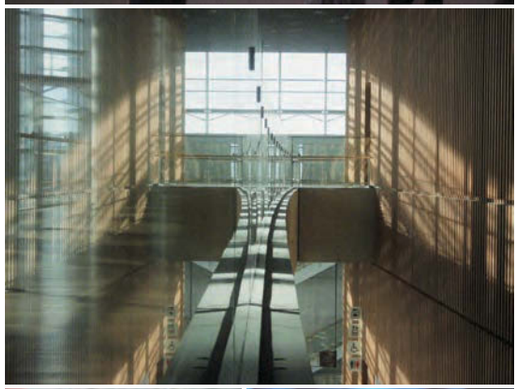
1. 講師のお話（30分）
「『Photograph』とは、『光の絵』という意味なんですよ」。始めに、写真やカメラの歴史について浜田さんから説明を聞きました。
続いて浜田さんの作品紹介。カメラを使って、ピントを外したり、手ぶれをさせて撮ると、不思議な世界が写し出されます。



2. 撮影（40分）
参加者は館内と美術館の敷地内で、自由に撮影ポイントを探します。カメラでとらえる対象は、風景や建物、人などなんでもOK。対象にぐっと近づいたり、遠くの景色をとらえたり。また、手ぶれやぼかしを用いて、思い思いに撮影を行います。

3. 制作（45分）
撮影した中から、写真を選び印刷します。
表面に手を加えたい人は、先のとがった画びょうで削り、白い線で写真に表情をつけていきます。

4. 作品発表および鑑賞（60分）
各自が厳選した写真をプロジェクターで大きく投影し、みんなで鑑賞しました。「どんな場所を撮影したと思いますか？」「これは何に見えますか？」「ここから何を想像しますか？」人それぞれ感じ方は異なり、鑑賞を通して想像の世界がどんどん広がっていきます。
最後は、一人1点お気に入りの作品を選び、フォトフレームに入れて持ち帰りました。



● まとめ
普段からカメラを使っている人も、カメラの操作に慣れていない人も、この日はカメラを「表現」するための道具として、気持ちも新たに撮影に挑戦しました。参加者は、持参したデジタルデジカメを使って、手ぶれやぼかしを用いたり、ユニークな構図を探すなどして、撮影を行いました。同じ対象を選んでも、とらえる角度や距離、ピントのあわせ方、シャッター速度によって、写し出される世界は異なります。今回のワークショップでは、記録撮影や記念写真のように目の前の光景を正確に写し出すのではなく、カメラを表現の道具として使うことを意識し撮影に取り組みました。参加者が撮影した写真は、どれも個性にあふれ、カメラを通して表現される世界の奥深さを感じさせるものでした。（AT）

● 参加者の感想
・デジタルカメラを使って抽象的表現に挑戦するということが面白かった。日常的に目にしている風景、建物、物が、違った視点で見ることで、全く見え方が変化したことが楽しかった。参加者の個性あふれる作品を見ることができてとても参考になった。（50代女性）
・普段の写真を撮るという行為に、アートの視点を取り入れることで、全く違う写真を撮ることができて、とても楽しかった。また、カメラと写真の歴史を知ることが出来たことも良かった。Photograph（光で描く）ということから、カメラで描くという体験も初めてできた。（40代女性）
・カメラを使って絵を描くという体験は、普段カメラは写すものだと思っている自分にとって新鮮でした。（20代男性）
・実践と振り返りがあってよかった。写真などのアートは個人個人の感想が違うので、それを発表する場があってよかった。（30代女性）

22

「パラモデルといっしょにプラレールであそぼう」

講師プロフィール / 林 泰彦（デザイナーを経て、京都市立芸術大学構想設計専攻卒業）と中野裕介（京都市立芸術大学大学院日本画専攻修了）が2001年に結成したアートユニット。「極楽模型」を主なテーマに、「プラレール」やミニカーなどのおもちゃを用いたインスタレーション、写真、絵画など、さまざまな素材や表現手法による作品を制作している。※「プラレール」は株式会社タカラトミーの登録商標です。

開催日時：2010年1月10日（日）13：30－16：00
協力：株式会社タカラトミー、MORI YU GALLERY
参加者：34名
対象：子どもから大人まで
参加費：無料
場所：3階講堂ほか

アーティスト・ワークショップ 22

paramodel（パラモデル） 現代美術家

概要 / 青いレールのおもちゃ「プラレール」を使って、現代美術作家パラモデルと一緒に大きな絵画を描きました。

使ったもの：「プラレール」（プラスチック製の鉄道玩具）、椅子、ビデオ、パソコン、プロジェクターなど

●プログラムの内容と流れ

1. 講師の活動紹介（15分）
プラスチックの玩具を用いたインスタレーションなど、ユニークな表現活動を展開しているパラモデルの活動についてお話を聞きました。

2. プラレールの取り扱い方と、制作スペースの説明（5分）
ワークショップの会場は、普段は講演会などが行われる講堂です。今日は、プラスチックのおもちゃ「プラレール」を使って、参加者全員で講堂に大きな絵を描きます。

3. 制作（30分）
テーマは、「宇宙の植物を描こう！」。パラモデルが講堂の数ヶ所にまいた「種」から、プラレールをつなげて、絵を広げていきます。
つながって、ひろがって、やがて「宇宙の植物」は講堂を飛び出し、屋外の竹林までのびていきました。

4. 絵の進行状況を確認（15分）
制作途中で上階に移動して講堂を見下ろし、絵の進み具合を確認しました。
「あそこまだつながってないね」「あの模様おもしろい。植物みたい」。

5. 制作（30分）
「宇宙の植物」はさらに成長し、どんどんのびていきます。大人も子どもも、みんなで協力してつなげるプラレール。いつの間にか参加者の間に一体感が生まれていました。

6. プラレールの上に電車を走らせる（25分）
講堂の床いっぱいに、さらには竹林までつながる、独創的な大きな絵が出来上がりました。みんなで協力してつないだレールはどこまでつながったのでしょうか。おもちゃの電車を走らせて、「宇宙の植物」の成長をみんなで体感しました。

7. 制作過程を撮影した映像を鑑賞（15分）
最後に、制作の様子を定点撮影した映像を全員で鑑賞しました。椅子が転々と置かれているだけだった講堂にプラレールの絵がどんどん広がってゆき、またその絵が崩されてなくなってゆく映像は、まるで青い植物の蔓が伸縮しているかのようです。
「いつもはおもちゃとして使っているプラレールで、空間をこんなに変えることができて、それを使って美術表現ができることを感じてもらえて良かったと思います」と中野さん。プラレールという「画材」で、講堂が大きな「作品」に生まれ変わったワークショップとなりました。

● まとめ
パラモデルのお二人を講師に迎えてのワークショップは、国立新美術館の空間を存分にいかしたアート体験となりました。

パラモデルが床にまいたいくつかの「種」から、プラレールをつなげ始めた参加者たち。いつもより椅子が少なくてガランとした印象の講堂に、青い線がのびて広がっていきます。椅子の下をくぐったり、隣の人のレールと合流したり、レールはどんどんつながって、2時間が過ぎる頃には、床を埋めつくすほどの青いレールの絵が出来上がり、講堂が独創的なアート空間に様変わりしていました。
「いつも遊んでいる玩具で、こんなに不思議で面白い世界が作れる」という中野さんの言葉に、プラレールを「画材」にして講堂を「作品」に仕上げた参加者は、大きく頷いていました。（NY）

● 参加者の感想
・何となくでつくっていって上から見たらどうなるんだろうと思っていましたが、意外とちゃんとした形になっていたり、他の人のつくったものからアイデアが得られたりと新鮮でした。（30代女性）
・子どもと一緒に参加出来て、大変おもしろかった。（30代男性）
・階段のところを、こえるのに苦労した。でも、階段をこえて外に出られたときは、うれしかった。（12歳 / 女子）
・こんなに大量のプラレールを使用した事がなかったので、スケールの大きさと皆さんの個性が一つになって達成感がありました。子供達の笑顔がとても良かったです。（40代男性）
・電車を走らせるだけじゃなくって、こういう使い方もあるんだなと思いました。（8歳 / 男子）
・子どもから大人まで、手と体と頭（？）を使って楽しめました。（30代女性）
・とても楽しく、創造性豊かなモノづくりに参加できたと思います。最後に線路がつながっていないのが、またよかった。（40代男性）

23

「人形作家とつくる、オリジナルキャラクター」

講師プロフィール / 東京生まれ、在住。2001年女子美術大学芸術学部洋画専攻卒業。大学卒業後、一点物で手縫いの人形作りを始める。本や雑誌上での作品掲載や、ギャラリーやショップでの作品展を中心に活動を行っている。

開催日時:2010年2月27日(土)13:30−17:30
参加者:22名
一般(小学生以下は、保護者同伴)
参加費:500円
場所:別館3階多目的ルームほか

アーティスト・ワークショップ 23

イシイリョウコ 人形作家

概要 / 身近にあるさまざまなものをきっかけに想像力を働かせ、新たにキャラクターとしてデザインし、手に持てるサイズの人形を作りました。

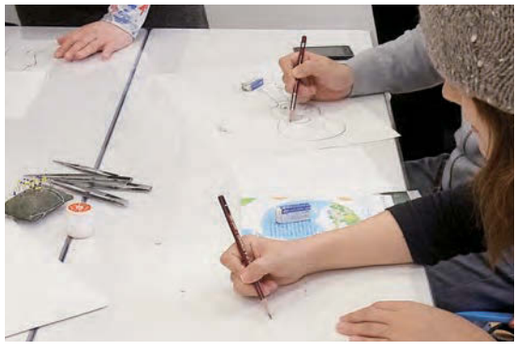
使ったもの:綿布、わた、ダンボール、色紙、アクリル絵具、油性ペン、ピンセット、糸、針など
参加者持ち物:個人的に使用したい筆やアクリル絵具、水彩絵具など

● プログラムの内容と流れ

1. 講師のお話(20分)
想像力あふれるキャラクターを生み出している、イシイリョウコさんが手がけた作品の紹介。顔を寄せ合う二羽の鳥がリボンに見えたり、ティーカップのシルエットがふくよかな女性になっていたりと独創的です。創造の源は身近にあるものです。

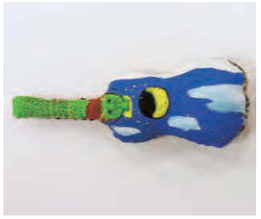
イシイさんの作品を実際に手にしたり、アイデアのヒントについてお話を聞くなどして想像の世界を広げます。

2. 制作(190分)
● アイデアスケッチ
「身の回りにあるものを、頭を柔らかくしてとらえてみましょう。ルールに縛られずに自由に作ってください」。イシイさんからのコメントを受けて、制作がスタート。



● 布や紙を使って制作
各自が考えたキャラクターのスケッチを元に、手に持てるサイズの人形を作ります。布を縫い合わせてわたをつめる人もいれば、ダンボールや色紙、布などを用いてコラージュする人も。
徐々に姿を表すキャラクター。形ができたら、アクリル絵具で色をつけていきます。

3. 作品発表(30分)
オリジナリティあふれる数々のキャラクターが出来上がりました。
「想像力をもって周りを見てみるといろんなものが生まれてきます。お家に帰ってからも、ぜひ作ってみてください」とのイシイさんのコメントで、ワークショップは幕を閉じました。



● まとめ
「身近にあるものを想像のきっかけにして、新しいキャラクターを生み出してみよう。頭に浮かんだアイデアから造形することを楽しもう」。そんな趣旨で開催されたワークショップには、子どもから大人まで幅広い年代が参加しました。アイデアは、美術館内から探しても良し、身に着けているものから考えても良し、心の中にあるものを形にしても良し。約3時間の制作を経て、アクリル絵具で彩色した色鮮やかな作品が完成。プロジェクターやパソコンがユーモアいっぱいの生き物になっていたり、美術館にある椅子や建物が擬人化されていたりと、個性あふれるキャラクターの数々が誕生しました。(AT)

● 参加者の感想
・頭で考えるより、手を動かしてみた方が形になって、自信につながるような気がしました。最初に考えていたものと違う形になっていくのもおもしろかったです。自分を知るきっかけになったような気がします。いろいろ作ってみたら、わかるんだなぁという気がしました。(30代女性)
・子どもを参加させたくて応募しました。どんな発想も手法も否定せず、ほめて頂き、娘もとても楽しんでいました。自由な発想を表現できる場所は、意外と少ないので親としても嬉しいイベントでした。(40代女性)
・久しぶりに想像(創造)することができ、とても楽しくあっという間の4時間でした。(40代男性)
・普段、非常に合理的なプロセスを踏んだ物づくりを行っているので、この様な純粋な作品づくりはとても新鮮で、何か新しい発想に結びつく大きなきっかけになったと思います。(30代男性)
・とても楽しく制作できました。最後の作品発表では、他の方の作品もみることができ、とても興味深く、楽しめました。(20代女性)

24

「傘をつかってアニメーションを作ろう」

「アーティスト・ファイル2010—現代の作家たち」展 関連企画

講師プロフィール / 「アーティスト・ファイル2010」展出品作家。1971年東京生まれ。女子美術大学、同大学院で版画を学んだ後、光と影に対する興味や、「世界は粒子で出来ている」という考え方をテーマに、絵画や写真、映像、インスタレーション作品などを制作、発表している。

開催日時：2010年3月20日（土）13：30－16：30
参加者：15名
一般（中学生以上）
参加費：500円
場所：別館3階多目的ルーム

アーティスト・ワークショップ 24

斎藤ちさと（さいとう ちさと） 美術家

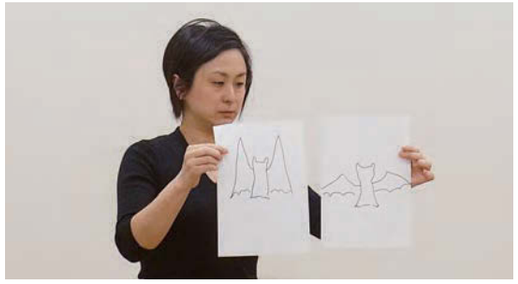
概要 / 手描きのアニメーション作品を手がける斎藤ちさとさんを講師に迎え、画用紙や傘を用いたアニメーション作りに挑戦しました。

使ったもの：黒い傘、黒画用紙、ポスカ（太・細各種）、画びょう、鏡など

● プログラムの内容と流れ

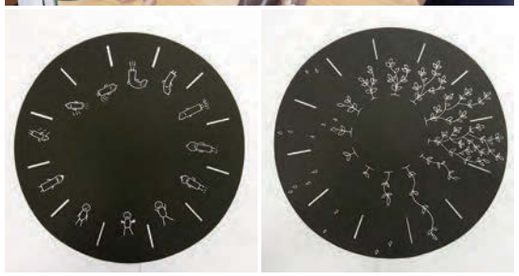
1. 参加者自己紹介（10分）

2. 講師のお話（30分）
絵が動いて見えるアニメーションの仕組みについてお話を聞きました。ご自身が描いた原画を手に説明する斎藤さん。



3. 制作（120分）
● 黒画用紙に描く
まずはどんな作品にするか、アイデアスケッチ。
イメージが固まったら丸く切り取られた黒画用紙に描いていきます。黒画用紙の隅に開けられた細長い切り込みの近くに、少しずつ変化をつけて描くのがポイント。

● 鏡に映して絵の動き方を確認
切り込みからのぞき込んで、紙をくるくる回して見てみると…なんと絵が動いて見えます！参加者は、お互いの作品を交換して鑑賞しました。
コミカルに動くキャラクター、つぼみが徐々に開いていく花の変化、表情を変える顔などさまざまです。



● 傘に描く
今度は、傘の上に描いていきます。身近な道具である傘が、アニメーションとしてどのように変化するのでしょうか。

4. 作品鑑賞（20分）
色鮮やかな絵が施された傘によるアニメーション作品が完成！大きな傘が支持体となったアニメーションは、黒画用紙に描いたものとは、迫力が違います。
最後は皆で作品を交換して、鑑賞会を行いました。

● まとめ
「身近なものを使ってアニメーションを作りましょう」。そんな斎藤さんの提案からワークショップは企画されました。「アーティスト・ファイル2010」展（2010年3月3日（水）～5月5日（水・祝））で、写真や独自の手描きアニメーション作品を展示していた斎藤さん。「身近なもの」として、アニメーション作りの素材に選んだのは傘でした。参加者は、回転させたときの動きの変化を想像しながら絵柄を考え、くるくると動く傘に苦心しながら描いていきました。完成した作品は、参加者同士で交換して鑑賞を行い、それぞれが描き出したアニメーションの世界を堪能しました。特殊な材料や複雑な技術を用いずに、身近な素材を用いてアニメーション作りを体験する機会となりました。（AT）

● 参加者の感想
・斎藤さんによる作品紹介を聞いた上で、ワークショップに取りかかることができたので、制作に真剣味が増しました。また、いきなり取りかかるのではなく、アニメーションの起源も学ぶことができ、よかったです。久しぶりに何かに夢中になりました。（20代女性）
・傘という身近なものを使って、これだけのアートが作れることに感激しました。（20代男性）
・傘に絵を描くのなんて初めてだったので、面白かったです。傘でアニメーションが作れてしまうなんて、おどろきました。身近なものが、ひと工夫でこんなに楽しくなるなんて感動でした。（20代女性）
・作家の方がどういう視点で作品をつくっていらっしゃるのか、普段は知る機会がないので、お話をうかがえたことも興味深かったです。実践は、久々に熱中しました！なかなか絵を描くことがないので楽しかったです。他の参加者の作品も見ることができて面白かったです。（20代女性）

平成22(2010)年度

25

「カラー・ワイヤーでつくる小物」

講師プロフィール / エリオット・ムキーゼ 1945年生まれ。南アフリカ第二の都市ダーバン近郊のクワマシュ在住。ズールー族の伝統的なかご編みの技術を用いて、明るい色彩の電話線を素材に作品を制作。南アフリカのワイヤー・アートの第一人者。/ ノンムブセレロ・マブンデュラ 1978年生まれ。ワイヤーを使ったバスケットの制作とデザインを学ぶ。身近な事物からインスピレーションを得て、室内装飾や果物入れを制作。ワイヤー・アートの若い世代を代表する作家である。

開催日時：2010年4月24日（土）【1】13：00－14：30
【2】15：00－16：30
参加者：24名（【1】13名、【2】11名）
対象：一般
参加費：300円
場所：地下ロビー
企画協力：駐日南アフリカ共和国大使館、南アフリカ通商産業省

アーティスト・ワークショップ 25

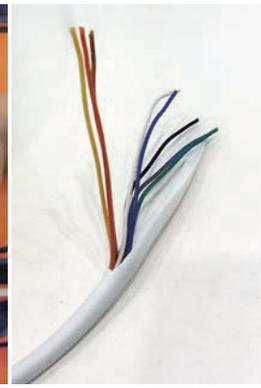
【1】エリオット・ムキーゼ ワイヤー・アーティスト
【2】ノンムブセレロ・マブンデュラ ワイヤー・アーティスト

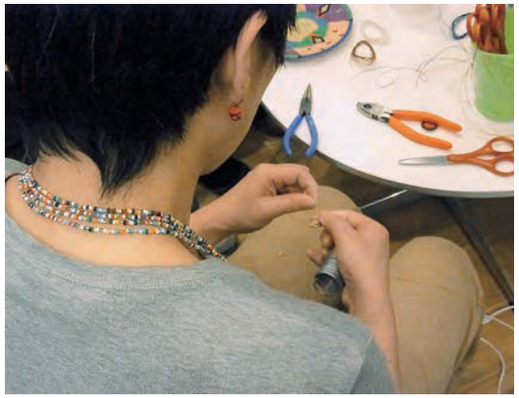
概要 / SFTギャラリーの出品作家である南アフリカの2名のワイヤー・アート作家が制作の実演を行うとともに、同じ素材で指輪などの小物を制作しました。

使ったもの：カラー・ワイヤー、針金、ペンチなど

● プログラムの内容と流れ

1. 講師による素材と制作方法に関する説明
イララパーム（椰子）の葉を草の芯に巻き付け、それらを一層ずつ編んでいくズールー族の伝統的なかご編みの技法を応用したワイヤー・アート。使われているのは、細くて扱いやすく、美しい色彩のワイヤーです。
作家が南アフリカから持参した電話線を切って開くと、様々な色彩のワイヤーが現れます。これを針金に巻き付けて編んでいきます。





2. 制作（30分程度）
ワイヤーの基本的な編み方を教わり、指輪や携帯ストラップなど、実際に身につけられる小物を作ります。出来上がりのデザインをイメージして、途中で色や模様を変えながら編んでいきます。

● まとめ
2010年は日本と南アフリカの国交樹立100年の年です。これを機に、国立新美術館ミューアジムショップ内のSFTギャラリーにおいて、南アフリカの工芸作家によるグループ展「南アフリカ・マスタークラフター」（2010年4月21日（水）～7月5日（月））が開催されました。南アフリカで尊敬の念を込めて「Master Crafter（マスター クラフター）」と呼ばれる4名の作家と、若手作家1名によるこの展示では、世代をこえて受け継がれる南アフリカの伝統的な文化と、それを現代的な感覚と融合しようとする革新的な取り組みが紹介されました。この展示に合わせて、ワイヤー・アートを手がける2名の出品作家が来日し、ワークショップを開催しました。
彼らの作品は、南アフリカ最大の民族集団であるズールー族の、伝統的なかご編みの技術を応用したもの。鮮やかな色彩と大胆な幾何学文様を特徴とするこれらの作品は、実は南アフリカのある電話会社の電話線のワイヤーを使って作られています。参加者は、伝統的な技法を現代的で身近な素材を使って受け継ぐ南アフリカの工芸の世界に触れるとともに、思いがけない素材を手に、色の組み合わせを工夫しながら、シンプルな技法で独創的な作品をつくることに挑戦しました。（HN）

26

「木ってなんだろう？
～見て、聞いて、さわってみよう～」

講師プロフィール / 1937年東京に生まれ、静岡県で育つ。家具製作会社、五反田製作所グループ代表取締役。日本では数少ない家具モデラーの第一人者。伝統的な家具の製作や修復などを手がけるとともに、建築家やデザイナーによるデザインを実際に形にしたり製品にするための試作などを行っている。

開催日時：2010年6月5日（土）13：30－16：30
参加者：23名
対象：小学生
参加費：500円
場所：別館3階多目的ルームほか

アーティスト・ワークショップ 26

宮本茂紀（みやもと しげき）　モデラー

概要 / 家具モデラーの宮本茂紀さんのお話や美術館敷地内の散策、作品制作などを通して、さまざまな角度から木に触れ、木について考えました。

使ったもの：10種類の木（カランタス、シカモア、レバノンスギ、クスノキ、ヤクスギ、セコイア、プラタナス、パープルハート、コクタン、ケヤキ）、紙やすり、ニスなど

● プログラムの内容と流れ

1. 講師のお話（60分）

● 宮本さんのお仕事について
宮本さんが手がけた、さまざまな樹種の木を使って作られた椅子。背中に気持ちよくフィットするように作られています。材質だけでなく、使う人のこともよく考えられているのです。

● 木についてのお話
宮本さんが世界中から集めたさまざまな木。珍しい色をした木もあります。

用意された10種類の木を、一個ずつ手にとって、手触りや重さを確かめながらお話を聞きます。「どんな場所に生えているの？」「高さはどれくらい？」
においも確認。クスノキやレバノンスギは特に強くにおいを感じます。

水に入れて重さも検証！重いコクタンは沈み、軽いシカモアは浮くことを知りました。

● 宮本さんへの質問タイム
「木工でつかうのは何の木ですか？」「セコイアは何年くらいかけて大きくなるの？」「日本には何種類くらい木がありますか？」いろいろな疑問が飛び出します。

2. 美術館の敷地内や館内を散策（50分）
「宮本さん、この木の実は何ですか？」「この木はなんという名前ですか？」
木肌を確かめたり、葉っぱのにおいをかいだり、木の実をかじってみたり…さまざまな方法で木に触れていきます。

美術館の中へ移動し、建物に使われている木の手触りを確認。床と壁では木の硬さが違います。それぞれの場所にふさわしい木が使われていることを知りました。

3. 制作（50分）
手触りやにおいを感じながら、粗さの異なる2種類の紙やすりを使って、木の表面をけずり滑らかにします。仕上げに、木目を美しくみせるためにニスをかけて完成！

● まとめ
何十年にもわたって家具の製作や修復などを手がけてきた宮本さんが、職人として接してきた木の世界をご自身の経験を交えて語るところからワークショップは始まりました。
もう採ることができない木、窓から見えるビルよりもずっと高い木、千年以上の長い年月をかけて育った木について知った子どもたち。宮本さんのお話を通して、ただ見ているだけでは分からない木の世界がどんどん広がっていきました。そして、国立新美術館の敷地内に生えている木に触れると共に、建築に使われている木材にも注目しながら館内を散策するなど、いつもとは異なる視点で木に親しみました。普段、私たちの生活の中で木は身近な存在ですが、ワークショップを通してさまざまな角度から接することによって、木に対する興味が深まり、これまでとは認識が変わる体験をした子どもたち。最後に宮本さんから「今日、木について知ったことや感じたことを頭の片隅において、これからも木を大切にしてください」というメッセージをいただきワークショップは幕を閉じました。（AT）

● 参加者の感想
・いろいろな種類の木をさわったり、においをかいだりすると、その木の事が分かるのを学びました。一番楽しかったのは、いろいろな種類の木を手でさわったり、感じたりしたことです。一番気に入った木の名前は、「セコイア」と「パープルハート」です！！（9歳 / 女子）
・最初はいろいろな話を聞いて、すごく楽しかったです。外に行ってどんぐりを食べたり、色々な葉、木をさわってすごく面白かったです。葉はみんなちがうにおいをもっていて、くさかったのもあった。木と葉のにおいが似ていたりして、楽しかったです。（12歳 / 男子）
・今日はいろんな木や、草にふれ、とても楽しかったです。言葉じゃあらわせないくらいの楽しさ。（10歳 / 女子）

27

「カラダで鑑賞！ マン・レイさんの世界」

講師プロフィール / 1990年に「珍しいキノコ舞踊団」を結成。以降、全作品の演出、振付、構成を担当。国内外で作品を発表している。映画、映像作品、TVコマーシャル、演劇への振付など、多岐にわたる活動を展開。2005年から桜美林大学非常勤講師を勤める。

開催日時：2010年8月29日（日）13：30－16：00
参加者：16名
対象：小学生
参加費：300円
場所：別館3階多目的ルーム、企画展示室1E

アーティスト・ワークショップ 27

伊藤千枝（いとう ちえ）　ダンサー、振付家、珍しいキノコ舞踊団主宰

概要 / マン・レイのポートレイト写真の中の人物について、想像を巡らせながら作品を鑑賞。
その後、自分の写真とマン・レイ作品を組み合わせて物語をつくり、身体の動きを通して表現しました。

使ったもの：マン・レイ作品図版、鏡、スピーカー、ホワイトボードなど
参加者持ち物：自分のお気に入りのポートレイト写真1枚

● プログラムの内容と流れ

1. 講師の活動紹介（15分）
床の上に座り、「珍しいキノコの舞踊団」のパフォーマンスや舞台の映像を鑑賞しました。その独特な作品の世界に子どもたちはぐいぐい引き込まれていきました。

2. 自己紹介（5分）
続いて自己紹介。各自、持参した自分の写真を見せながら、「自分」について語ります。

3. ウォーミングアップとワークショップの説明（30分）
伊藤さんの準備体操は、他とはちょっと違います。「身体をこすって」「お友達もこすって」「次はゴロゴロ転がって」「4本足であるいて」「今度は3本足」というように。
楽しい準備体操をしていると、自然に皆、仲良くなっていきました。

4. 「マン・レイ」展を見学（45分）
● 4グループに分かれ、与えられたテーマの作品を探しながら展覧会を鑑賞
「宿題を一緒にするなら？」「ドッジボールを一緒にするなら？」「一緒にご飯を食べるなら？」「放課後一緒に掃除をするなら？」各グループに子どもたちにとって身近なテーマが一つ与えられ、グループごとに「マン・レイ」展を見学しました。
写し出された人はどんな人だったのかなどと想像しながら作品鑑賞を楽しみました。

5. 創作（40分）
● マン・レイのポートレイト作品の中から、与えられたテーマにふさわしいと思う写真を各自1枚選択。
● 子どもたちが持参した写真とマン・レイの写真を組み合わせて、グループで一連のストーリーを作り、振付を考案。ポートレイトに写し出された人の性格や仕草を想像して、テーマに合わせた動きをつけていきました。たとえば、「宿題」チームはさらにテーマを広げて「学校での一日」についてストーリーを作りました。「この人、社会の先生みたい！」「休み時間はボールを投げて遊ぼう！」

6. 発表（15分）
● 試行錯誤を重ね、個性の光る振付が完成
動きの順番が皆にもわかるように、ホワイトボードに写真を楽譜のように順番に並べて発表しました。「宿題を一緒にするなら？」グループは、図工の時間…算数の時間…給食を食べて…と、ポートレイトから想像して面白い振付が出来ました。他のグループも、テーマにあわせて、楽しい振付を発表しました。

● まとめ
身体の動きを通して作品を鑑賞するこのワークショップの講師は、個性的な振付でTVコマーシャルなどでも活躍しコンテンポラリーダンス界を牽引するダンサー兼振付家の伊藤さん。ウォーミングアップで身体をほぐすところから、3本足で歩いたりと、ユニークな動作で緊張がほぐれ、楽しい雰囲気に包まれました。子どもにはちょっと難しそうな「マン・レイ」展（2010年7月14日（水）～9月13日（月））も、伊藤さんがグループごとに割り当てた「一緒にご飯を食べに行くとしたら誰と行きたい？」などという身近なテーマをきっかけに、楽しく鑑賞することができました。ユニークな切り口で作品を鑑賞した後、その体験を自分たちの振付作品にまとめました。マン・レイのポートレイト作品と、持参した自分たちのポートレイト写真を組み合わせ、3～4人のグループで一つの物語を考えてそれを身体で表現する作業は、初めて出会った人たちとの作業だったので、最初は少し戸惑いもありました。しかし、伊藤さんや「珍しいキノコの舞踊団」の人たちと一緒に振付を考えるうちに、いつの間にか子どもたちも積極的にストーリーの展開や新たな動作を提案。最後の発表では、どのグループも独創的な動きを披露しました。いつもとは違う方法で作品鑑賞を楽しみ、それを共同で新たなコレオグラフィーとして作品化するワークショップとなりました。（YM）

● 参加者の感想
・今まで、展覧会などは何度も来たことがあったけれど、こういうふうにテーマなどを決めて見たのは初めてで、とても楽しかったです。（10歳 / 女子）
・みんなでマン・レイさんの写真を見て、そのあとのポーズをするところが楽しかったです。また家でもやってみたいです。（7歳 / 女子）
・写真を探して、それをまねてポーズをとるのが楽しかったです。曲に合わせてだったので踊りやすかったです。（9歳 / 女子）

28

「カメラでとらえよう 風のそよぎ 光のゆらぎ」

「陰影礼讃―国立美術館コレクションによる」展 関連企画

講師プロフィール / 「陰影礼讃」展出品作家。兵庫県生まれ。大阪教育大学大学院教育学研究科修了。身近な木々や木もれ日などを写真に撮り、NECOと呼ばれる特殊な機械で大判の和紙などに印刷した作品で知られる。大阪教育大学教授。

開催日時:2010年10月2日(土)13:00−17:00
参加者:20名
対象:一般(小学校4年生以上)
参加費:500円
場所:別館3階多目的ルームほか

アーティスト・ワークショップ 28

秋岡美帆(あきおか みほ) 現代美術家

概要 / 身の周りの風景をデジタルカメラを通してとらえ、陰影の変化や空気の揺らぎに注目した作品づくりに挑戦しました。

使ったもの:パソコン、プロジェクター、インクジェットプリンター、カードリーダー、各種印刷用紙(普通紙、カラーペーパー、耳付き和紙、OHPフィルムなど)、不織布など
参加者持ち物:デジタルカメラ

● プログラムの内容と流れ

1. 「陰影礼讃」展に出品されている秋岡さんの作品を鑑賞(15分)
同じ木を撮影した3枚の写真を元に制作された作品《ながれ》《よどみ》《そよぎ》を秋岡さんとともに鑑賞します。

2. 講師のお話(40分)
「意識によって目の前の光景がぼやけたり、くっきりしたりする、自分の目の働きに驚かされる」という秋岡さん。

3. 美術館の内外を散策し、気になる景色をデジタルカメラで撮影(60分)
建物や木々、道端で見つけた草花、行き交う人など、あらゆるものが被写体に。いつも何気なく見ている風景も、じっくり目を向けると気になるものが見えてきます。ピントをはずすことで、目に見えるものとは異なる風景がとらえられることも。

4. 写真を選び、印刷する(45分)
撮影した写真の中から、気に入ったものを選び、和紙や色紙、透明なOHPフィルムなど、通常の印画紙とは異なる素材に印刷します。同じデータの写真でも、印刷する素材によってさまざまな表情が生まれます。

5. 作品発表(35分)
風にゆれるススキや美術館に差し込む光、下から見上げるガラス壁など、同じ時間と場所を撮影しても、とらえる景色は人それぞれ。被写体に何を感じてシャッターを切ったのか、印刷してどのような変化があったのか、発表します。

和紙とOHPフィルムに印刷した写真を重ねると、色がより鮮やかに。透き通った窓ガラスに当てた写真は、窓の向こうの空と交わって、新しい表情を見せました。最後に、参加者全員の作品をプロジェクターで半透明の布に投影して鑑賞しました。

● まとめ

木々や木漏れ日をカメラで撮影し、大判の和紙などにプリントした秋岡さんの作品には、風にそよぐ木の一瞬の姿や、揺らぐ陽光の軌跡が繊細に表現されています。それらは絵画や版画、写真といった領域に限定されることのない、現代美術ならではの表現と言えます。「陰影礼讃」展(2010年9月8日(水)〜10月18日(月))に展示されていた秋岡さんの作品を鑑賞した後、参加者はデジタルカメラを手に美術館とその周辺を巡り、各々の心をとらえた風景をカメラに収めました。三次元からデジタルの世界に置き換えられた風景は、今度はさまざまな紙の上へと転写されていきます。紙質による風合いの違いも楽しみながら制作された作品には、参加者が目にした光と影、出会った風景が色鮮やかに留められていました。「質の違うものの上に映像がのったときに、初めて目に見えてくるものがあります」と秋岡さん。いつもは記録するために撮る写真も、視点を変え、印刷する方法を変えることで、新鮮な表情が生まれます。普段何気なく見ている風景から、思いがけない世界を発見するワークショップとなりました。(HN)

● 参加者の感想

・OHPシートに印刷してみると、今まで自分が感じ得なかった色の映り具合い、光の透過具合いが感じられ、またそれを重ねてみることによって立体感が生まれてきたのが意外だった。(20代女性)
・「写真はピントが合っていないと」とか、「印画紙にきれいに刷られていないと」とか思い込みがありました。自分が表現したいもの、ことを考えて写真に向き合うことを教わりました。(40代女性)
・日頃からもっと写真を撮ってみたいと思いました。(40代女性)
・自分で作品をつくることによって、より展示作品を楽しむことができました。今までにない展覧会の楽しみ方を発見しました。(40代女性)

29

「私の線を集めよう」

講師プロフィール / 1963年東京生まれ。1988年、多摩美術大学大学院美術研究科修了。2005年、文化庁新進芸術家国内研究員。紙やカンヴァスを支持体に、クレヨンや油絵具などの画材を用いて独自の描法を追求。はかなく神秘的な雰囲気を持ちつつも生命力に満ち溢れた作品を制作している。

開催日時：2011年2月19日（土）13：30－17：00
参加者：24名
対象：一般
参加費：500円
場所：別館3階多目的ルーム

アーティスト・ワークショップ 29

金田実生（かねだ みお）　画家

概要 / 画家の金田実生さんを講師に迎え、さまざまな画材や技法を学びながら「私の線」を追求し、ドローイングを描きました。

使ったもの：画用紙、オイルパステル、木炭、墨、練墨、割り箸、アクリル絵具、色鉛筆、フィキサチーフなど
参加者持ち物：タオル、アイマスク

● プログラムの内容と流れ

1. 講師の活動紹介と「線」についてのレクチャー（30分）
● 金田さんの作品について
目に見えないもの、自分の気持ちや記憶など形のないものを表現しているという金田さんの作品に、参加者は引き込まれていきました。

● さまざまな線、線と色や音との関係
筆圧による表現の違いや火や糸、コーヒー、指などで引かれた線、そして隣り合う色がどのように響きあうのかという色彩の効果について、さらには、五線譜の上にドローイングを描き、それを音に置き換えて演奏する音楽家の話など、線に関する興味深いお話を聞きました。

2. 制作①（ウォーミングアップ）（30分）
● 目を閉じて、瞼の裏に見える線をオイルパステル2本を用いて描く（90秒）×3回
心を自由にするための準備体操でしたが、「絵が描けない」と思っていた人たちも、この過程を経て「私にも描ける！」という自信をつけました。あまりの楽しさに「もっと描きたい」と思うように。

3. さまざまな線のデモンストレーション（15分）
● 画材の説明
オイルパステル、木炭、色鉛筆、墨、割り箸、絵具
● 感覚の表現
筆圧、強弱、スピード、線を重ねることによってさまざまな線が描けることを金田さんが実践。

4. 制作②（30分）
● 課題「自由に描く / 交わらない線を描く」
● 何を描くか迷った人へのキーワード
「昨日起こったできごと」「昔から覚えていること」「いつも気になること」「へなちょこ」「よわよわ」「スピード」「じんじん」「あざやか」「めまぐるしい」「笑い声」「痛い」

自分の線を求めて、参加者たちはさまざまな線を引きました。

5. 発表（35分）
「どのような線を求め、何を描いたのか」一言ずつ発表しました。

● まとめ
「アーティスト・ファイル2009」展の出品作家でもあった金田さんを講師に迎えたワークショップは、徹底的に「線」と向き合うものでした。
絵画の基本的な要素である「線」。あまりにベーシックな存在のため軽視されがちな「線」に対して、金田さんがいかに真摯に向かい合ってきたのか――色彩や音楽との関係など深い考察について話を聞き、参加者たちは次第に「線」に魅了されていきました。
瞼の裏に見える「線」を描く準備体操で心が解放された参加者たちが、思い思いの画材を手に、自分の気持ちや感覚を紙に描こうと、真剣に画用紙に向き合う様子がとても印象的でした。気がつけば、割り箸の先を細かく割いて筆代わりに使ったり、指を使って描いたり、色鉛筆を3本同時に持って描いたり…それぞれが独自の方法で自分の「線」を探すことに没頭しました。金田さんによって紹介された「線」の世界は、絵画作品の新しい見方へとつながる、鮮烈な体験となりました。（YM）

● 参加者の感想
・無心になれて楽しかったです。技術や知識がなくても自分を発信できるということを発見できました。（30代女性）
・ドローイングの意味を知り、それを実行できてとても楽しかったです。（50代女性）
・テーマのないものを描くのは難しかったです。普段、作品を鑑賞することが多いのですが、作る気持ちも味わえて楽しかったです。先生のお話もとてもわかりやすかったです。（30代女性）
・普段はイラストレーションを好きでよく描いているのですが、「線」という単純なものをもう一度考える機会になりました。（10代女性）
・自分を解放するのが難しく、思うように描けなかったが、他の方々の作品を拝見して、大いに刺激を受けました。（60代女性）

ワークショップリスト

	アーティスト・ワークショップ	講師	開催日時	対象	参加者数	場所
1	「自分のシンボルマークを作ろう！」 プログラム「教えて！可士和さん！」（講演会とワークショップの同時開催）	佐藤可士和	2007.3.24	小学校高学年	18名	別館3階多目的ルーム
2	「からだを遊ぶ！」 「スキン＋ボーンズ―1980年代以降の建築とファッション」展 関連企画 ボーンズ編	楠原竜也	2007.7.29	小学校3〜6年生	11名	別館3階多目的ルーム、講堂、企画展示室2Eほか
3	「３Dな布（スキン）を作る」 「スキン＋ボーンズ―1980年代以降の建築とファッション」展 関連企画 スキン編	菱沼良樹	2007.8.4	一般	22名	別館3階多目的ルーム
4	大学生とのワークショップ 「アートまわりのおしゃべり―感じたこと、聞きたいこと」 「安齊重男の “私・写・録”（パーソナル フォト アーカイブス） 1970−2006」展 関連企画	安齊重男	2007.9.23 2007.9.30	大学生	23日 18名 30日 33名	別館3階多目的ルーム
5	高校生のためのデザインワークショップ 「学校のシンボルマークを作ろう」「自分のシンボルマークを作ろう」 「ADC大学」同時開催	中島祥文、松永 真、浅葉克己、永井一史	2007.10.20 2007.10.21	高校生	20日 36名 21日 38名	別館3階多目的ルーム
6	「わたしの家、わたしの服〜着られるお家をつくろう〜」	山縣良和、mafuyu	2007.12.1	小学校3〜6年生	23名	別館3階多目的ルーム、1階ロビー、地下SFTギャラリー
7	「今日はちょっぴり画伯な気分〜奥谷 博先生と描く美術館〜」	奥谷 博	2008.1.27	小学校4〜中学校3年生	12名	別館3階多目的ルーム、企画展示室2Eほか
8	「くんくんウォーク〜美術館のにおいを探せ！〜」	井上尚子	2008.2.16	4歳以上（小学生未満は保護者同伴）	29名	別館3階多目的ルーム、国立新美術館内
9	「ヒューマンサイズ・プロジェクト〜つくろう！自分サイズのバルーン！〜」 「アーティスト・ファイル2008―現代の作家たち」展 関連企画	市川武史	2008.3.15 2008.3.16	子どもから大人まで	15日 19名 16日 27名	講堂、研修室ABC、竹林
10	「空想の場所をつくってみよう」 「アーティスト・ファイル2008―現代の作家たち」展 関連企画	さわひらき	2008.4.12	8〜15歳	11名	別館3階多目的ルームほか
11	「ミナ ペルホネンでつくる未来生活」 プログラム「ミナ ペルホネンとデザイン」（講演会とワークショップの同時開催）	皆川 明	2008.5.18	子どもから大人まで	20名	別館3階多目的ルーム
12	「鑑賞ワークショップ〜ことばで楽しむエミリー展〜」 「エミリー・ウングワレー展―アボリジニが生んだ天才画家」関連企画	白鳥建二	2008.7.6	一般	22名	企画展示室2E、講堂
13	「アイスベキモノタチ〜発見！おもしろデザイン！〜」	清水久和	2008.8.24	小学生以上の親子	親子8組 21名	別館3階多目的ルームほか
14	「デザインってなんだろう？？〜やってみよう！イスのデザイン〜」	紺野弘道	2008.9.28	小学生	29名	別館3階多目的ルームほか
15	「六本木をつづる〜散策を“手紙”にたくして〜」	秋山さやか	2008.12.21	小学生から大人まで（小学生は保護者同伴）	20名	別館3階多目的ルームほか

	アーティスト・ワークショップ	講師	開催日時	対象	参加者数	場所
16	「作ろう！オリジナル・モビール」	藤城成貴	2009.2.14	一般（中学生以上）	22名	別館3階多目的ルーム
17	「ミニチュア・ムシワールド〜虫からみた世界をつくろう〜」 「アーティスト・ファイル2009―現代の作家たち」展 関連企画	大平 實	2009.3.8	小学生	17名	別館3階多目的ルーム、企画展示室2E
18	「石から生み出すいろいろなカタチ」 「アーティスト・ファイル2009―現代の作家たち」展 関連企画	村井進吾	2009.4.5	小学校4年生以上	18名	別館3階多目的ルームほか
19	「やってみよう、美術体操〜名画、名作を体感！〜」	高橋唐子	2009.8.22	小学生	13名	別館3階多目的ルーム
20	「チャレンジ！抽象画〜向き合う心、あふれ出る色〜」 「光　松本陽子／野口里佳」展 関連企画	松本陽子	2009.9.12	一般	21名	別館3階多目的ルームほか
21	「とらえよう、レンズの向こう側〜デジカメで撮る抽象写真〜」	浜田 涼	2009.12.19	一般（小学校4年生以上）	19名	別館3階多目的ルームほか
22	「パラモデルといっしょにプラレールであそぼう」	paramodel	2010.1.10	子どもから大人まで	34名	3階講堂ほか
23	「人形作家とつくる、オリジナルキャラクター」	イシイリョウコ	2010.2.27	一般（小学生以下は、保護者同伴）	22名	別館3階多目的ルームほか
24	「傘をつかってアニメーションを作ろう」 「アーティストファイル2010―現代の作家たち」展 関連企画	斎藤ちさと	2010.3.20	一般（中学生以上）	15名	別館3階多目的ルーム
25	「カラー・ワイヤーでつくる小物」	エリオット・ムキーゼ、ノンムプセレロ・マブンデュラ	2010.4.24	一般	24名（2回合計）	地下ロビー
26	「木ってなんだろう？ 〜見て、聞いて、さわってみよう〜」	宮本茂紀	2010.6.5	小学生	23名	別館3階多目的ルームほか
27	「カラダで鑑賞！ マン・レイさんの世界」	伊藤千枝	2010.8.29	小学生	16名	別館3階多目的ルーム、企画展示室1E
28	「カメラでとらえよう 風のそよぎ 光のゆらぎ」 「陰影礼讃―国立美術館コレクションによる」展 関連企画	秋岡美帆	2010.10.2	一般（小学校4年生以上）	20名	別館3階多目的ルームほか
29	「私の線を集めよう」	金田実生	2011.2.19	一般	24名	別館3階多目的ルーム

やってみよう、アート

国立新美術館ワークショップ記録集

編　　集 ： 国立新美術館 教育普及室
執　　筆 ： 西野華子（教育普及室長・主任研究員）
本橋弥生（主任研究員）
吉澤菜摘（研究補佐員）
鳥居 茜（研究補佐員）
デザイン ： 松下 計、森井美紅
制　　作 ： 株式会社アイワード
発　　行 ： 国立新美術館
〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2
発行日：2011年12月16日